

国語が担う これからの教養

英文学者、評論家

外山滋比古

(とやま しげひこ)



■「教養」はそもそも役に立たない
——日本において「教養」とは、どのような言葉だったのでしょうか。

今日いうような教養が問題になったのは、大正時代ですね。大正中頃から新しい旧制高等学校がたくさんできたのです。その旧制高等学校は外国語の教育を最優先した。特に英語とドイツ語を中心として、多くの時間を外国語学習に費やした。その語学力を背景とした、主に文学や哲学などの文科系の知識によって、人間的理解力を伸ばす。そういう教育を受けた人たちが昭和の初め頃から出てきて、教養ということを非常に大事にした。

具体的に何ができるかということではなくて、外国系の広い知識をもっていることが教養とされた。

書けるような英語を学ばせろ、などと、特に理系の教師や専門課程の教師から攻撃されました。一般社会からも、もっと役に立つ英語を身につけるという風当たりが強かった。

教養というのは批判されると守りにくい。結局、外国文化を背景とする教養主義は、実用主義と専門主義のふたつに負けたのです。こうして、大正から続いた、外国語、外国文化を中心とする教養は、昭和三〇年代の終わりに衰退しました。

■国語科から考える「新しい教養」
——教養主義が衰退した今日、新しい教養、これからの教養、といったものを求める風潮も感じます。国語科としてはそのことにどのように向き合っていくべきでしょうか。

現代社会は非常に実利的、経済的、技術的になってきた。それに対して、「仕事はしない」と悠々として生きている人は、今の世の中にはほとんどいない。ですから、リベラル・エデュケーションのあり方が変わる必要がある。

長い間国語を勉強したのに、手紙を書けないとか、ろくに書類を読めないとか、もっと役に立つ言葉の教育をやれ、という批判に、答えられることが必要です。

教養が現代社会で評価されるには、知識を増やし

ですから、はっきり言えば役に立たない。

そもそも、教養教育は、元をたどれば、リベラル・アーツ、リベラル・エデュケーションです。これは、古代ギリシア、ローマにさかのぼります。このリベラルというのは、今の「自由」とは意味が違う。

当時はいわゆる奴隷と自由人がいて、奴隷が生産活動をし、自由人は生産活動をし、自由人は時間があるから、知的な遊戯として学問をやり、それによって人間性を高めようと考えた。自由七科(文法、論理学、修辞学、数学、幾何学、音楽、天文学)と呼ばれるものです。それがルネサンスで盛り返し、ヨーロッパの教養のルーツとなった。

つまり、役に立たないことを初めから前提としているわけです。働く必要がない人間の学問でした。

■教養主義 vs. 実用主義・専門主義
日本では戦後、新制大学が発足したときに、専門課程の準備段階として教養課程が設置された。その頃大学にいた教員の大部分が旧制高等学校出身で、大正の教養教育を受けている。教養課程が設置されたのは、ごく自然な流れでした。

こうして教養が大学で制度化されたわけですが、一般教養などといって英語の小説を少しかじったところで、何の役にも立たない。それより早く論文を

て喜ぶという教養では駄目です。それはコンピュータがやってしまします。知識のあることが教養だとしたら、インターネットは大教養人ということになる。人間はかないません。

そうではなくて、生きていく力、例えば失敗をしたときどう対処するかという力は、インターネットにもコンピュータにもない。そういうことを、言葉を通じて学ぶことができれば、これからの競争社会において大切な力となるでしょう。

人間が生きていく力、生活、生産、そういうものを教養はこれまで毛嫌いできた。今の社会の情勢を考えると、そのような教養は力をもみません。そうでなくて、専門とは違った意味で、教養が生きる力を高めることがはつきりすれば価値がある。

たとえば、国語で文章を解釈する努力をしていると、頭の中にある種の新しい力がはたらいて、自然科学を学ぶにしても、政治をやるにしても、商売をするにしても、それが支える力となる。そうならば、放っておいても、「ぜひ学ぼう」となるでしょう。

また、日本の国語教育では「話す」「聞く」という能力を、重視してこなかったと思います。しかし、読み書きよりも「話す」「聞く」ことのほうが生活に近く、はるかに重要性が高い。学習指導要領では「話す、聞く、書く、読む」の四領域を平行して身につ



けることになっていくはずですが、それが実現できていないのは、反省するべきです。

生きていく力としての国語力を考えるならば、当然、「話す」「聞く」力を学校教育の中でどう位置づけていくかを考えなければなりません。これまでの文字中心の教育と、「話す」「聞く」教育を、どう融合させていくか。大きな問題です。

■危機を乗り越える力と国語教育

大正教養主義の時代には、一部の文化人がもてはやされましたが、本当の意味の学力、生きる力を身につけた人は、松下幸之助にしても、本田宗一郎にしても、ろくに学校も行かず、苦労して、経験から学んだ。そういう叩き上げの人の生き方の密度と、外国の本を辞書を引きながら読む生活の密度とは、全然違います。

競争社会では必ず負ける人が出てきます。負けた時にくじけてしまうか、新しい光を求めて立ち上がって、前を向いて歩いていくか。現実における危機を乗り越える力が大切です。これは、知識ではなく、エネルギーですね。新しいエネルギーをつくる力。それを学校教育の中で引き受けることができるとしたら、やっぱり国語でしょう。

言葉は一人一人の人間力、生きる力を支え、心を

支える。たとえば、しっかりと国語教育を受けていれば簡単に自殺なんかしない、と言うことができれば、実際の、実利的な社会でも国語の教育は十分価値があります。社会科学や数学ではできません。生きる力として最も有効なのは言葉の教育である、ということになれば、国語教育は教育の中核的な役割を果たせるはずです。

■言葉の教養が思考・発想をつくる

——教養主義では理科系が排除されていたというのですが、理科系の学生に対する言葉の教育も必要です。

教養に対する「無駄だ」「役に立たない」という批判は、理科系の人びとや実業界からですが、彼らは、言葉というものにあまり価値を認めていないのかもしれない。しかし、それは間違っています。文科系の教養がみな飾り物に見えてしまうのは、彼らが初めから、専門的、実用的な知識ばかりを追求しているからでしょう。

では、日本の理科系の教育で、本当の意味で優れた新しいことを考えだす力を養えているかというと、必ずしもそうならない。ノーベル賞受賞者も、外国へ行つて外国から刺激を受けた人が多い。

外国の教育に頼らずに世界的な業績を上げた人としては、湯川秀樹さんくらいです。彼の場合はちょ

明治の人ならきつと、簡潔明瞭な漢語を作ったでしょうね。いまの日本人は言葉の力が弱い。

■古典を守るのではなく変えていく

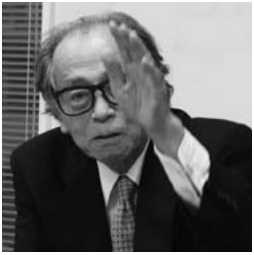
——古典離れが指摘されていることをどう考えますか。

古典がどのように私たちの人間力になるかを考えないと、いくら読んでも仕方がない。たとえば、千年前に書かれた『源氏物語』を読んで、現代の社会にどう生かすことができるのか。

古典は作者が作るのではない。後の時代の人々が形成したものです。『源氏物語』を古典にした力は、だいたい鎌倉期にある。それ以降、本居宣長の時代、谷崎潤一郎が現代語訳した時代、そして現代。それぞれに、『源氏物語』の意義は違うはずです。そういうことを考えずに、ただ古典をありがたがるだけでは駄目でしょう。

古典はいつも変化している。古典というのは守るものではなく、いつも新しく変えていく、時代によって変わっていくものです。時代、時代における解り力の問題なのです。自分が生きている時代を正確にとらえ、誠実に過去と向き合い、ひとりひとりが古典をつくっていく。そういう意識をもつことが大切だと思います。

たとえば、現代的な感覚からすると『源氏物語』

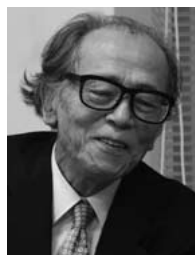


■新しいものを生み出した漢文の教養

——今日では漢文の教育に時間をあまり割けなくなってきています。

明治の頃に、外国からきた言葉を次々と日本語に変えた。これはみんな漢学者でした。漢字漢文の素養があったことで、明治時代にヨーロッパの文化を咀嚼し、基本的な概念を全部漢字によって日本で作ってしまった。これはすごいことです。外来のもの、新しいものを、自分たちのものにしたのはすごい創造力。それは、湯川秀樹さんの新しいものを生み出す力にもつながっていると思います。

最近では、新聞を見るとアルファベットばかりです。「TTP」などと書いてあっても、誰も意味がわからない。それで賛成とか反対とか言っても仕方がない。



外山滋比古(とやましげひこ)
一九二三(大正一二)―。英文
学者、評論家。愛知県生まれ。
主な著書―『日本語の論理』
『ことば点描』など。

よりも『枕草子』のほうが、はるかにおもしろいと考える人がいてもいいと思う。清少納言ほど知性がある、あれほどのエッセイを書ける人というのは、現代ではちよつといないのではないか。

ある時代が生み出した古典が、次の時代にも生きるかもしれないし、消えるかもしれない。それは後生が決めることです。そうだとすると、教科書に何を載せるかというのは、現代における古典を定めることにつながるわけで、大変なことですね。

■日本語に誇りをもつための国語教育■

――生きる力につながる教養を、どのようにすれば作り出していけるのでしょうか。

自分の言葉を好きになること、国語を、母国語である日本語を好きになることです。

言葉愛するというのは、一種のナシヨナリズムです。ナシヨナリズムというと、すぐ危ないなどと言う人もいますが、決してそうではない。自分の言葉愛するというのは、健全な文化的ナシヨナリズム。人間にとって最も基本的な心情なのです。

国語を愛するにはどうすればいいか。ひとつには、外国語を勉強してみることです。国語の中にどっぷりつかっていは本当の国語がわからない。外国語と比較することで、日本語のすばらしさが見えてき

ます。

たとえば、日本語は敬語が非常に発達している。敬語が発達しているということは、人間社会として成熟している証拠なのです。敬語を使ってけんかをすることは難しいでしょう。敬語はものごとを平和に運び、人間同士が親しみあい、尊敬しあう気持ちの表れです。これは日本語が誇るべきことです。

戦後、敬語は遅れた封建思想の名残だなどといって、敬語をなくそうとする動きがあった。これは大変な愚拳です。一度なくなったら、敬語を取り戻すのは大変です。これからの国語教育では、敬語を再生していく必要があります。敬語は一種の言葉の古典なのです。古典としての敬語を、捨ててしまうのではなく、新しい時代にふさわしいものに変えていくべきでしょう。

日本人が自分の国の言葉に誇りを持ち、愛情をもつ。そのためには、学校の先生がそういう意識をもつ必要がある。戦後の国語教育は無国籍的で外国追随式のところがあつた。それは決して悪いことだけではないけれども、日本人として日本語に誇りをもつことができる国語の教育が必要です。もっと日本語を大事にすることが必要なのです。

――ありがとうございます。

(二〇一三年八月三日 大修館書店本社にて)

教科書教材の筆者にきく いまどきの「教養」とは？

大修館の「国語総合」「現代文B」教科書の教材をご執筆いただいている識者の方々に、いまどきの「教養」をどう考えるか、下の①②③の質問にお答えいただきました。（対象は、大修館の平成二五年度版「国語総合」教科書、および、来春使用開始の「現代文B」の教材執筆者です。）

尼ヶ崎彬

（あまがさき あきこ）



一九四七（昭和二三）生。美学者。主な著書「近代詩の誕生」「戦争と文藝」など。教科書収録教材：「姿——日本のレトリック」之（現代文B下巻）

- ①「教養」とはかつては知識でしたが、現在ではむしろ知識についての技術であると思います。それは次の三つです。
- ・ 一見正しい言葉に疑問をもつこと（問題発見能力）。
 - ・ それについてさまざまな知識と意見を集め、比較すること（情報収集・整理能力）。
 - ・ それについて自分でもっとも合理的

的と思える仮説を構築すること（論理的思考力）。

- ② 石牟礼道子『苦海浄土』（講談社文庫）

・ ベネディクト・アンダーソン『想像の共同体』（白石さや＋白石隆訳 N T T出版）

・ エリック・ホブズボウム＋テレンス・レンジャー編『創られた伝統』（前川啓治＋梶原景昭訳 紀伊國屋書店）

・ 佐藤道信『日本美術の誕生』（講談社選書メチエ）

- ③ 過去の「教養」のイメージはブルデューの言う「文化資本」。しかし現代に必要な「教養」というものがあ

るとすれば、それは上の①のようなものになります。

あわやのぶい

（あわや のぶい）



一九五一（昭和二六）生。異文化ジャーナリスト。主な著書「選べる男」など。教科書収録教材：「空飛ぶ魔法のほうき」之（新編現代文B）

- ① 知識以前に感性を養うこと。いろいろなことを見たり聞いたり体験をし、感覚を自然にみがくこと。
- ② 夏目、芥川など近代の基礎的文学を読む。
- ③ 知識をとりさった後の知のたたずまい。知のあり方。

池上嘉彦

（いけがみ よしひこ）



一九三四（昭和九）生。言語学者。主な著書「スル」と「ナル」の「皇學」など。教科書収録教材：「言葉についての新しい認識」（国語総合 現代文編）「精選国語総合」

- ① 日本の言語・文化について外国の人にも分かってもらえるように説明する能力を身につけること。（外国語で説明できるようにするのは、もう少し後でも結構です。）
- ② 具体的にすぐ思いつくようなものはありません。すぐに役立ちそうなものを求めるよりは、日本の言語・文化について書かれたものを対象化・相対化する姿勢で読んでみるとよいでしょう。
- ③ 人に見せるものではなくて、人が感じとってくれるもの。日本ででも、外国でも、そういうふうに感じさせられる人に出会う機会があると思います。その時は、何が自分にそう感じさせるのか、考えてみて下さい。

上田恵介

（うえだ けいすけ）



一九五〇（昭和二五）生。生物学者。主な著書「二夫人の神話」など。教科書収録教材：「ウサギの耳はなぜ長い？」（新編現代文B）

- ① 高校生に教養は要らない。ただ教養をもてる人間になるためには、深いチャレンジングな読書をして欲しい。
- ② 三木清『人生論ノート』
- ③ 人間がサルではなく人間であるための最も大切な資質。

内山節

（うちやま たかし）



一九五〇（昭和二五）生。哲学者。主な著書「労働過程論ノート」など。教科書収録教材：「自然と人間の関係をとおして考える」（国語総合 現代文編）「精選国語総合」

- ① 文章を書きながら考える力。
- ② 国木田独步『武蔵野』・柳田国男『遠野物語』・キェルケゴール『死に至る病』

・ ショーペンハウエル『読書について』

- ③ 視野を広くもって「常識」を疑い自由思考するための基礎能力。

加賀美幸子

（かがみ さちこ）



一九四〇（昭和一五）生。アナウンサー。主な著書「マとほの心に耳をすませば」など。教科書収録教材：「メッセージ探しの旅」（新編国語総合）

- ① 国語・ことばは、広く深く…多くの世界を内在しています。形だけでなく、その心と力をよみとれること。よみとり、考え、伝える力をつけてほしい。
- ② 人間の道のりを知り、日本語の豊かさ、ひびきを確認するためにも、古典を読み、親しんでほしい。生き方の確認という意味では『徒然草』。
- ③ 自らを知り、補っていくこと。人間とは、生きるとは…広く見つめる力。



- ①高校生のうちに身につけてほしい国語の「教養」とは、どのようなものですか？
 ②「教養」として高校生に読んでほしい本を挙げてください。
 ③「教養」という言葉に対するイメージ、お考えなど、自由にお書きください。

柏木博

(かしわき ひろし)



一九四六（昭和二一）。評論家。主な著書「デザイン
の二〇世紀」。教科書収録教材：「しきり」の文化論（国
語総合 現代文編）

- ①小説、詩、エッセイ、評論などさまざまな
文章を読み、感想文ではなく、自
分の意見を論理的に述べる力。また、
その表現あるいは文体を工夫する力。
②・寺田寅彦の日記（寺田寅彦全集）
所収、岩波書店
・夏目漱石「心」（漱石全集）所収、
岩波書店
・宮沢賢治「童話」（校本宮澤賢治
全集）所収、筑摩書房
・W・ベンヤミン『ベンヤミン 子
どものための文化史』（平凡社）
・E・H・ゴンブリッチ『若い読者の
ための世界史』（中央公論美術出版）
③「いかに生きるかを主体的に選択す
るにあたっての基礎力」ということ、
というのがよく言われてきた「教養」
の意味だろう。けれども、それが何

香山リカ

(かやまりか)



一九六〇（昭和三五）。精神科医。主な著書「しがみ
つかない生き方」など。教科書収録教材：「空気を読む」（国
語総合 現代文編）「羅漢語総合」

- ①おとなになって壁にぶつかったとき
に、問題を言語化して整理し、解決
のために参考になる作品や文献など
をあたることができる能力。
②吉野源三郎『君たちはどう生きるか』
③評価や成績といった数値化された目
標からは解放された、自由で深みの
ある知識。

小関智弘

(こせき ともひろ)



一九三三（昭和八）。施設工作家。主な著書「粹な旋
盤」など。教科書収録教材：「鉄を削る」（新編現代文B）

かを明確に語ることでできない、時
代によって、語る人によって意味が
異なる言葉のように思える。

榎木野衣

(えのき のゐ)



一九六二（昭和三七）。美術批評家。主な著書「戦争
と万博」など。教科書収録教材：「あらわれ」と「消え
去り」——日本のアート（精選現代文B）

- ①世界史
②網野善彦『日本』とは何か（講談
社）
③通念にとらわれないため通念を習得
すること。

鈴木孝夫

(すずき たかお)



一九六（大正二五）。言語学者。主な著書「ことば
と文化」など。教科書収録教材：「人を指す言葉——自称
詞・対称詞・他称詞」（現代文B 上巻）

- ①(イ)社会を歴史的にみる目をもつこ
と。

(ロ)人間のすばらしさ、多様さを感じ
とれる能力。

(ハ)文庫から学びとる能力。

- ②(イ)井上ひさし『日本語教室』

(ロ)国語辞典を、引くではなく、読む
本として、いつも手元に。

- ③「最も深く考える者は、最もいきい
きとしたものを愛す」（ヘルダーリ
ン）ということばを、青春時代座右
の銘のようにしてきました。いきい
きとしていない教養なんて、ウソッ
パチです。

坂村健

(さかむら けん)



一九五一（昭和二六）。情報工学者。主な著書「ユビ
キタスとは何か」など。教科書収録教材：「人工の自然」
——科学技術時代の今を生きるために（新編現代文B）

- ①③の考えにより「国語の哲学」と言
い換えるなら、それは日本語とい
ものの言語としての設計コンセプト

- ①例えば「百人一首」を暗記してみる。
後でいろいろな役に立つことが分かる。
②鈴木孝夫『日本語教のすすめ』（新
潮新書『私の言語学』（大修館書店）
③成人した後、何かにつけて「あれだ
な」「そうだがこれは、どこかで覚え
たぞ」などと頭に浮かんでくるよう
な名文句や歌、文章などがでくる
ような本を何冊か読んでおくとい
い。

竹内啓

(たけうち けい)



一九三三（昭和八）。経済学者。主な著書「高度技術社
会と人間」など。教科書収録教材：「地球システムのの中
の人間」（精選現代文B）

- ①日本語の文章を論理的に正しく理解
できる能力。
②「古典」とされる大きな本（何でも
よい）。
③「教養ある人」とはとらわれないもの
の見方ができる人を意味すると思う。



- ①高校生のうちに身につけてほしい国語の「教養」とは、どのようなものですか？
 ②「教養」として高校生に読んでほしい本を挙げてください。
 ③「教養」という言葉に対するイメージ、お考えなど、自由にお書きください。

中村桂子

(なむら けいこ)



一九三六（昭和一一）―。生命誌研究者。主な著書「生命誌の世界」など。教科書収録教材：「虫愛する姫君」（現代文B上巻）

①「美しい言葉で話すこと」これに尽きます。美しいとは何かなどという面倒なことは抜きにして、誰かが聞いても美しいと思える言葉を話すことです。そのために必要なことはすべて身につけて欲しいと思います。

②古典（昭和のものも含み良書として残ってきたもの）の中から自分に合うものを探して読んで欲しいです。私は、三・一一の後『方丈記』を読み、天災・人災の続く中で、現場を訪れ生き方を考えた著者に多くを学びました。印象深かったです。出合いが大事です。

③教養は culture、耕作です。自然に向き合い、そこから学び、新しいものを作り出してきた人間の営みがその基本であり、単に本を読むことと

長谷川一

(はせがわ はじめ)



一九六六（昭和四一）―。社会学者。主な著書「アトランティックの国」など。教科書収録教材：「システムとしてのセルフサービス」（現代文B上巻）「精選現代文B」

①読解力です。読解力とは、わたしたちが世界を諒解する可能性を規定するものです。わたしたちは自身のもつ読解力の限界を越えて物事を理解することはできません。しかも困ったことに、多くのばあい、その事実が気づかず、自己の読解力を世界の大きさと等しいと過誤しがちです。わたしたちが、世界をより広く、より深く、よりの確に理解しようとするのなら、じぶん自身の読解力を

西垣通

(にしがき とおる)



一九四八（昭和二三）―。情報学者、作家。主な著書「ウェブ社会をどう生きるか」など。教科書収録教材：「生命情報・社会情報・機械情報」（現代文B上巻）

①コトバの深みを感じる能力。
 ②少なくとも半世紀以上に書かれ、古典とよばれる本（分野、テーマ、著者を問わず）。

③狭い利害得失を超えた長い射程の思考を汲みあげる井戸。

野矢茂樹

(のや しげき)



一九五四（昭和二九）―。哲学者。主な著書「哲学の謎」など。教科書収録教材：「猫は後悔するか」（現代文B下巻）「精選現代文B」

少しずつでも着実に拡張し、豊かにしてゆくほかに道はありません。
 ②一冊でも多くの本を読み、多くのテクストに触れることです。そのさい大切なのは、特定のジャンルだけに閉じた読書をしてしまわないことです。なるべく幅広く大量に読むことが重要です。「乱読」といわれてもかまいません。高校生であれば、背伸びをして専門的な本をかじること、子ども向けの本をあらためて読みなおすこともできます。一年間にせめて100冊くらいは読みましょう。もちろん多読だけでなく、テクストを精密に読んでゆく精読も必要です。それにはトレーニングが不可欠なのですが、大学生になってから勉強すれば十分です。高校生時代に培っておきたいのは、多くのテクストに触れ、読解力を養っておくこと。それがすべての下地となるからです。
 ③「教養」という言葉にたいしては、適度な距離をとって接する態度が妥当だともっています。

①語学力としての日本語をしっかりと身につけてほしい。それは「教養」というよりも、もつと生活に密着した基本的な「読み書き」の力というべきものではないか。

②内容はそれぞれの関心によりますが、ともかく著者の考えが明確に追える、そういう明晰な文章をたくさん読んでほしいと思います。

③教養は博覧強記とはまったく違います。ものごとの核心をつかみそれを自由にかつ的確に使いこなせる力です。その意味で、私の中では、教養とはすなわち哲学にほかなりません。

橋本治

(はしもと おさむ)



一九四八（昭和二三）―。小説家、イラストレーター。主な著書「霧の森の物語」など。教科書収録教材：「霧の森の物語」（現代文B上巻）「精選現代文B」

①文中に登場する漢字の意味を前後の関係で類推する力です。

②「教養」というカテゴリーは崩れて

ある時代において「教養」とは、それ自体が直接有用なものではなく、だからこそ人格陶冶や人間形成に不可欠なものとしてきました。昨今はそれが反転し、知識は実際の役にたつべきであり、そうでない知識は無駄であるという実学的な考えが広がっています。

③「教養」という言葉は、それが唯一の「正しい意味」をもつと前提するのではなく、それがどのような社会的・文化的状況のなかで、どんな立場のひとによって、どのように語られてきたかという観点からとらえられるべきだともっています。

原研哉

(はら けんや)



一九五八（昭和二三）―。グラフィックデザイナー。主な著書「白」など。教科書収録教材：「白」（国語総合現代文編）「精選国語総合」

①ことばの美しさを解する力。

②兼好法師『徒然草』

③「ひらかれている」こと。



- ①高校生のうちに身につけてほしい国語の「教養」とは、どのようなものですか？
 ②「教養」として高校生に読んでほしい本を挙げてください。
 ③「教養」という言葉に対するイメージ、お考えなど、自由にお書きください。

原島博

(はらしま ひろし)



一九四五（昭和二〇）。電子情報工学者。主な著書「願学への招待」など。教科書収録教材：「メディアとしての顔」（国語総合現代文編）「精選国語総合」

- ①人は言語によって、思考し、対話し、表現します。また先人の知に触れます。国語はその能力を身につけます。それはすべて教養の源です。特に表現する能力は大切です。高校生のうちに身につけてほしいと思います。
- ②まずは本屋に行くことを勧めます。そこは教養の宝庫です。そこで純粋な好奇心から興味を持った本を見つけてください。それを読むことが教養になります。教養を身につけるためのマニュアルはありません。
- ③すぐに役にたつ知識は教養とは言いません。ヨーロッパでは、かつてはラテン語を読めることが教養人の資格でした。言い換えれば、役にたたないことの大切さを知っていること、それが教養です。

坂東眞理子

(ばんどう まりこ)



一九四六（昭和二一）。評論家。主な著書「女性の品格」など。教科書収録教材：「稼ぐだけの目的か」（新編現代文B）

- ①読む量をふやす（大部の本、大量の情報にチャレンジして下さい）。歴史を知る。
- ②・ロマン・ローラン「ジャン・クリストフ」
 ・塩野七生「ローマ人の物語」
 ・「日本の歴史」（中央公論社）
- ③1. 人間の基礎、この上に、知識・スキルが育つ。
 2. 人間に対する愛、自尊感情を。

福岡伸一

(ふくおか しんいち)



一九五九（昭和三四）。生物学者。主な著書「生物と無生物のあいだ」など。教科書収録教材：「生きることと食べることの意味」（国語総合現代文編）「新編国語総合」
 「センス・オブ・ワンダー」を追いかけて（精選国語総合C）

堀田力

(ほった つとむ)



一九三四（昭和九）。弁論士。主な著書「心の復活」など。教科書収録教材：「ボランティアという名の「無償財」（新編国語総合C）

- ①一般新聞紙一面掲載記事の文意を理解し、報じられた事象の社会的意義を述べられる程度の読解力。
- ②社会科の教科書（暗記の対象としてでなく、自分の理性と感性で理解する対象として）。
- ③表現された内容を理解するだけでなく、その社会的意義あるいは自分にとっての意義を把握し、自分の中に位置づけてはじめて、その表現に接した意味が生じるのであろう。

四方田犬彦

(よまた いぬひこ)



一九五三（昭和二八）。映画史研究家、評論家。主な著書「映画史への招待」など。教科書収録教材：「二かわい」現象」（国語総合現代文編）

- ①日本語の特性を知ること。美しい日本語とはどのような文章であるのか味わえること。

- ②今昔物語、伊勢物語、源氏物語など日本の古典文学（一部でよい）。

- ③教養とは、ものしり博士になることではなく、ものごとの成り立ちについて時間軸が引けることだと思っています。科学について言えば、科学的知識があるだけでなく、科学史を理解していること。文学で言えば、たくさん小説を読んでいるだけでなく、小説家の評伝や文学史を知っていること。

伏木亨

(ふしき とおる)



一九五三（昭和二八）。農学者。主な著書「コクと旨味の秘密」など。教科書収録教材：「からだで味わう動物と情報を味わう」問（現代文B下巻）

- ①話や文章のニュアンスを正しく、深く理解できる力。

- ①優れた文語の文章を暗記し思うがままにそれを引用できる力。（西欧におけるラテン語への言及をお考え下さい）。

- ②誰もが当然読んでいることを前提として対話ができるような本が沢山必要です。ギリシャ神話。旧約聖書。

- ③自分の生業を越えて未知なるものに敬意をもって近づく力だと思っています。

鷺谷いづみ

(わしたに いづみ)



一九五〇（昭和二五）。生態学・保全生態学者。主な著書「生物多様性入門」など。教科書収録教材：「生物多様性の恩恵」（現代文B下巻）

- ①自らの教養を常に向上させていくことのできる読書力と理解力を養うための意欲を伴う親和性。
- ②ダーウィン「種の起源」
- ③自然・社会を含む世界をしつかりと見極めて理解することができるとの素養。



ネット時代に必要な「伝える力」

こでらのぶよし
小寺信良

コラムリスト／一般社団法人インターネットユーザー協会代表理事

■SNSに可能性はあるか

高校生の携帯電話（スマートフォンも含む）の所持率は、もうここ数年来97%程度の高水準を維持している。当然のように高校生は、インターネットを使ったコミュニケーションの世界にどっぷり浸かっていると考えていい。人気のLINEやTwitterだけでなく、ニコニコ生放送のような映像まで、コミュニケーションツールとして使われている。過去娯楽の王様であったテレビは、一方的にエンタテイメントを送りつけるメディアだったが、今は双方向コミュニケーションの時代だ。結局面白いのは「人の話」という、娯楽の原点に戻りつつあるのかもしれない。従来、子どもたちにインターネット・リテラシー教育を行なう場合には、「情報の発信」や「発言の責任」などという言葉が使われてきた。だがどうもそれでは話が抽象的すぎて、うまく伝わっていないの

ではないか。もつとかみ砕いて言えば、要するにそれは「自分の言いたいことを誤解のないようにわかって貰える力」ということだろう。

SNS（ソーシャルネットワーキングサービス）においてそれを実現するには、一定の文章力が必要になる。だが現在の子どもたちのコミュニケーションを見てみると、相手との議論を避け、簡単な言葉でとりあえず全部肯定してしまおうという傾向が見られる。SNSの機能として、いちいち文章を書かずとも「いいね！」ボタンや、感情を表わすスタンプ（エモーションナルなアイコン、略してエモティコンと言う）を使って賛意を示す程度の、薄くて軽いコミュニケーションに留まっているようだ。とりあえず賛同しておけば大過なく過ごせるという、子どもたちなりの身を守る知恵なのかもしれないが、それでは単純作業的に数をこなしているだけである。

特定の読み手に対して文章を書く、という行為は、

平たくいえば「手紙」である。だが国語教育として「手紙を書く」という授業は、小学生のときには経験があるが、中学なり、高校なりのレベルで行なわれているだろうか。いや、今さら紙の手紙を書く授業が必要とは言わないが、依頼文、告知文といったフォーマルなメールの書き方や、必要事項を取りこぼさない、気配りのある返信の仕方といったことは、そもそも誰がいつ教えるのか。子どもを持つ保護者の意見として、これを国語科で担当して頂ければ、相応に教養のレベルが上がるのと思う。

さらに自分が遭遇した出来事をレポートする、相手の意見に対して感想を述べるといった文章力は、ネットを使ったコミュニケーションを高い水準に引き上げるために必要であり、この力こそ、より高いレベルの人たちの輪に入っていくためのパスポートでもある。

実は、ネットのコミュニケーションを上手く使えば、そこは学びの場として機能する。かく言う筆者も、かつては文章とは無縁の、テレビの裏方の世界で生きてきた。だが当時のパソコン通信時代に、多くの優れた（だが無名の）書き手の文章を沢山読み、

自分も発言して議論に参加することで、自分の主張をわかりやすく表現するトレーニングをすることができた。これが長じて、今は文筆業をやっているのだから、世の中わからない。当時36歳にもなつて転業できたのは、ネットのコミュニケーションから文の書き方、というか、「文字でのモノの言い方」を学んだからだ。

■文字入力支援による合理性と弊害

ネットのコミュニケーションを語る上で、これまでもあまり組上に上ったことがないのが、文字入力メソッドに伴う環境変化である。言い換えれば、どこで、どのような時に、どのような形でコミュニケーションを発生させているか、そういう問題だ。

パソコン通信時代、そしてインターネット登場後には匿名掲示板の隆盛、ブログの勃興など、様々な形で個人が文章を公開した。なぜあれほどまで、議論のために人が膨大な文章を書いたかと言えば、それは良くも悪くもパソコンでしか参加できなかったからであろう。パソコンは家庭内で、決まった場所に設置しており、決まった姿勢で集中を要求する。必然的に、よく読み、よく書くというサイクルが発



生した。また両手を使う入力方法は、ローマ字入力にしてもかな入力にしても、慣れれば高速に長文を入力することができた。

入力の主役がケータイに移った際に、ネットのコミュニケーションは爆発的に量を増した。片手で10キーを使って入力する方法は、電車やバスでの移動中、あるいは待ち時間、寝る前のベッドの中を主戦場に変えていった。

その一方で、先頭の2、3文字を入力しただけでそれに続く文章の候補を提示してくれる予測変換は、オリジナルの文章を築く能力と、バリエーションの発生を著しく減退させた。コミュニケーションはテンプレートの応酬となり、文章ではおぼつかない感情表現は、絵文字によって代用された。

現在入力の主役は、スマホのフリック入力に変わりつつある。ガラス上に表示されたあかさたな…の文字盤を指でスライドさせながら入力する方法だ。スマホも次第に画面が大きくなる傾向があるため、片手で本体を支え、もう片方の手で入力するしかない。さらに画面上には物理的な突起がないために、入力中は常に画面を注視していなければ、操作位置がずれてしまう。この意味するところは、主戦場は

ケータイと同じながら、コミュニケーションへの集中度は、パソコン時代に逆戻りしたということだ。これは文章の学習という視点からすれば、一つのチャンスである。

現在多くの学校では、ケータイ／スマホを使ったコミュニケーション文章作成を授業で取り扱っていない。そもそもケータイを学校へ持ち込むことを禁止している公立高校もまだ多数あること、必ず生徒全員が持っているという確証がないということから、学校教育内で実施するのが難しいという現実がある。その一方で、遠距離通学者が多い私立校では、保護者側の強い希望により、ケータイ／スマホの持ち込みを許可しているところも多い。さらには授業内で活用する学校もあり、夏休みのレポート提出をメールと写真添付に切り換えたところ、提出率が1.7倍に上がったという例もある。

IT機器の利用に取り組む学校とそうでない学校では、生徒のITリテラシーに大きく差が付き始めている。

■国語教育が果たす役割

社会に出れば、多くの会社で仕事の連絡や報告、

スケジュール調整やミーティングなどは、ITを利用する。すでに業務連絡をLINEで行なう会社も出てきている。移動中で出られない場合が多い通話

はもはや連絡の主体ではなく、パソコン、スマホ、タブレット何でも使って文字ベースでコミュニケーションをとりながら、仕事を進めてゆく時代である。

だが上長とのやり取りの中で、必要なことが順序立てて書けない、人の書いたものから必要な事項を読み取れない、敬語で文章が書けないために顧客とトラブルを起こすといった若者が出現してきており、業務に支障が出る事態も起こっている。そもそもコミュニケーションがしつかりとれば、細々した報告書などは本来必要ないはずなのに、コミュニケーション文が上手く書けないがために、仕事が増えているケースもある。

SNSの中で人と仲良くできないといったことは、本質的な問題ではない。コミュニケーション型の作文力と読解力が低ければ、そもそも誰とも「うまくやる」ことなどできないのである。

今、実学を謳う高校も多い。多くは農業、工業、商業といった実業を意味することが多いが、どんな職業に就こうとも変わらない実学とは、人

の意見をちゃんと伝えることであろう。それは文章でも、スピーチでも構わない。

そうは言っても、読む力、知る力はどうする、という問題もある。だが筆者が職業文筆家になつて思うのは、説得力のある意見を述べるためには、それについてより多くを知らないと言えないということである。それは、知っていることを書くのとは違う。バックボーンとしての知識という基礎体力があるか、という問題なのだ。書くために多くの本を読み、人の話を聞きに行く。

知るのが先か、出すのが先か。普通はまず知らないと出せない、と考える。だが出す先がなければ、知る必要がない、とも考えられるのだ。かつて筆者が高校生の頃は、まさにそんな状態であった。だが現代の子どもたちは、出す先は山のようにある。多くを知れば、多くを語れる。広大なコミュニケーションの世界にいる子どもたちに、これほどまでに魅力的なことがあるのか。

爆発的なコミュニケーションの時代は、同時に国語教育の総合的な成果が求められる時代が到来したのだと言える。



大学生のレポート・発表と新たな「言語文化」

おしまやよい
大島弥生

東京海洋大学大学院海洋科学技術研究科
海洋科学系海洋政策文化学部門准教授

■大学での日本語表現能力育成科目

近年、大学生のための日本語表現能力育成科目が広まっている。筆者の勤務する東京海洋大学海洋科学部でも、平成十三年に一年生の必修科目としてレポートや発表を指導する科目が開設された。筆者はもともと留学生への日本語教育が専門だが、海洋科学等の教員や非常勤講師とともにこの科目を担当している。

大学での日本語表現能力育成科目ではさまざまなアプローチがとられ、語彙や表現といった狭義の日本語能力だけでなく、問題発見・解決能力、背景の異なる他者（たとえば他学部学生）と協働して政策提案やグループ発表を遂行する能力といった幅広い力の育成が同時に目指されている事例もある（成田秀夫ら編著『大学生の日本語リテラシーをいかに高めるか（仮）』ひつじ書房、近刊）。社会生活や研究生

活を意識した、新たな「言語文化」の導入の場として期待されている側面もある。

本学では、「海・食・環境」に関するテーマで論証を行う二千〜四千字程度のレポート（外来魚の駆除をX市は推進すべきか、等の題目）を十五週かけて作成し、そのプロセスでは毎回、学生同士の協働推敲（ピア・レスポンス）活動を行うという授業実践を行っている。無論この実践例で大学生の日本語科目の現状を網羅的に説明できるわけではないが、この実践の中で気づいたことをまとめてみたい。

たとえば、ある学生が「バイオエタノールっておもしろそうだな」という興味でテーマを選んだら、教材（大島弥生ら『ピアで学ぶ大学生のための日本語表現』二〇〇五年、ひつじ書房）にそって、以下のようなプロセスでレポートを仕上げていくことになる。まず、関連の書籍やサイトを調べる。このときに大学

図書館職員のガイダンスで図書館内外の書籍検索の方法や、「新書マップ」「Webcat Plus」といった便利な検索サイトの使い方を知る。調べていくうちに、バイオエタノールの技術が、まだ課題が多い段階であること、とくにトウモロコシなどの穀物由来の場合には食糧の高騰につながることを知る。一方で、ある種の藻など、食用でない植物を利用すればその問題を回避でき、その技術開発に自学の教員が取り組んでいることにたどりつく。こうして知った多くの知識は、構想や構成を練る段階の毎回の協働推敲時に、活動ペアの相手に口頭で説明しなければならぬ。相手からの質問に答えることで、漠然としていた主張が絞られ、想定される反論にも再反論が用意されていく。とはいえ、全員が順調にレポート作成プロセスでの課題を解決しているわけではない。このプロセスの中で、多くの学生がつまづきを感じ、行きつ戻りつを繰り返す。

■レポート作成指導のポイント

このレポート作成プロセスを授業ですすめる中では、いくつかのことを心がけている。

一つは動機づけのために、なぜその日のその作業、

その項目の学習が必要かということをしつこく繰り返して伝えることである。これには、協働担当者として授業に入ってくれている理系の教員からの指導が効果を上げる。すなわち、今訓練している文章作成は、近い将来の仕事の遂行に直結するというメッセージである。自然科学の研究にどれほどのお金が必要で、申請書で畑違いの読み手を説得できなければ資金獲得はできない、論文で他者に誤読されない文を書かないとどれほど危険か、そう教員が力説すると、一年生は目を丸くして聞いている。「立派な文章がいい文章」ではなく、「文章が書けなければ仕事にならない。自分の夢が実現できない」というメッセージを、初めて聞いたのだろう。この日の振り返りシートには、「なぜ文章力が必要か初めてわかった」といった感想が多い。今まで書いていたものとは目的や評価軸の異なる、新たな文章の「言語文化」に触れた瞬間であるともいえる。

もう一つは、調べたことをもとに文章を書かせる際に、何度も学生間での対話活動（協働推敲活動）を課すことである。これには二つの大きな利点がある。一つは、調べたことを、目の前の相手に説明することを通じて、とにかく一度は自分の中をくぐら



せるということである。個々に調べさせてPCでレポートを書かせれば、多くの部分がインターネットからの「コピペ」になりがちだ。手書きのアウトラインを作らせて肉声で説明させることで、その情報を自分がどう並べ直して主張を再構成したのか、初めて認識するということが多々起こる。活動が、ネット利用という新たな「言語文化」への対応となることも期待したい。

対話活動のもう一つの利点は、学生同士の文章の相互参照の機会の増大である。協働推敲をするには、相手のアウトラインや下書きを丹念に読まざるをえない。クラスメートの書いたものを読むのは小学校の文集以来という学生も多い。教科書の文章と異なり、相手の書いた文章は自分も書けるようになるべきモデルとして意識される。いくら注意しても章節の見出しをつけなかった学生が、他の学生がきちんとできているのを見てその場であわてて書き込んだりする。他者と同じレベルにしなければという圧力は、教師の指示より効果がある。また、展開や表現の欠点は、自分の文章よりも他者の文章で気づきやすい。論文的な表現や慣習も、相手の文章を仔細に点検するためと思えば、真剣に学習する。学生は相

させて、それをもとに文字化させることもある。口頭表現能力とパワーポイント作成などの視覚的演出能力は、十年前より大幅に向上している印象がある。人前で話せば意見がはっきりするのなら、それを文章作成に利用すればよいだろう。本人にとって、得意な部分を活かす方略が見えれば、授業の目的は達成される。

また、誤字脱字やねじれ文、話し言葉の混在、間違っただけの慣用表現といった、いわゆる「乱れた日本語」は、たしかに多くの学生に見られる特徴である。とはいえ、頻発する誤用や悪文のチェックポイントを繰り返し小テストで練習すると、かなり意識できるようになる。章番号の表記、引用の書式、読点のルールなども、見本をまねれば徐々にできるようになる。むしろ問題なのは、「提出しさえすれば不可にはならない」という意識の問題である。これには「提出物は正式な書類」「がんばったね、では社会で通用しない」という規範を教育機関全体で示す必要があるだろう。実社会の中での文章の役割という新たな「言語文化」を意識させなければなら

ない。「文章にならない」ことに苦しむ学生がいる一方

手を傷つけまいとする配慮意識が強いので、むしろ指摘や質問を多く出すことが書き手への貢献であると強調している。

■学生の抱える問題と授業の課題

学生がレポートや発表をつくり上げる過程で見えてくる問題点には、傾向があることに気づいた。

たとえば、大好きな在来種の魚の危機や地元の河川の汚染をテーマにしている、あふれんばかりの思い入れがあるのに、なかなか文字化が進まない学生がいる。対話活動では「A湖やB川の在来種、やばいんだよ」と熱く語るが、個別の事実を貫く主張を見つけて再構成するアウトラインが書けない。こんな時には、対話の相手に聞き取りをさせて構成メモを書かせることもある。対話の相手が「つまり一律の対策ではだめで、それぞれの地域の特徴に応じた保護策が必要ってこと？」といった具合に、自然に抽象度の高いことばに置き換えて確認してくれて、その語彙を取り入れて文章化が進むこともある。活動の中で、話し言葉と書き言葉という異種の「言語文化」間を行き来しているともいえる。

文章化が苦手な学生には、口頭発表の練習を録音

で、たくさんの資料を集めて細かいデータを羅列する学生もいる。本人はかなり良くできた満足している。しかし、なぜそれらを取り上げて並べたのか、そこから何を言いたいのかを問うと、はつきり答えられない。ある問題についてたくさん調べることと、調べた情報を再構成して議論を積み上げることは異なる。こちらは文字数も多く書いているだけに、本人も自分に何が足りないのか、むしろ気づきにくいものかもしれない。インターネット上に情報があふれる現在では、何のためにその情報を利用したのかを常に問う指導や活動が、より重要になるだろう。

実際には、履修して多くの気づきを得る学生もあれば、「必修単位をこなせた」で終わったようにみえる学生もある。いずれにしても、大学生への日本語表現の指導は、自分が日本語を用いて、今、そして将来何を為すのか、そのために自分に足りない知識・能力・習慣・意識・方略は何かということを感じさせる場、未知の目的や価値観を持つ新たな「言語文化」を知る場となることが求められている。



漢文の領分

こ た じ ま よ う す け
古田島洋介

明星大学人文学部日本文学学科教授

ひねくれ根性と言われればそれまでだが、この数年來、漢文について「教養」という語が持ち出されるのを見ると、何となく厭わしい気分になる。単なる知識にとどまらぬ「教養」としての漢文。なるほど、漠然と耳にしているかぎりには、甚だ喜ばしく響くに違いない。

けれども、この言い方には、二つの前提があるはずだ。まずは事実認識として知識と教養の二項対立がある。さらには価値評価として教養を知識よりも上位に置く優劣関係がある。近ごろ、こうした大小の前提が、どうも素直に受け取れなくなってきた。何かしら思い違いがありはしないだろうか。

二

知識と教養の二項対立に疑問を抱く一つの理由

結果としてAは和文脈の訳文、Bは漢文脈の訳文だと理解できるのが漢文の「知識」となる。

こうした「素養」という語の使い方が恣意的に映るのであれば、あわてて撤回し、他の語に置き換えてもかまわない。けれども、日本の知識人たちが、古來、このような意味での「素養」を持っていたことはたしかだろう。

わかりやすくパソコンの機能にたとえてみれば、「素養」はOS (operating system)、「教養」はアプリ (application)、「知識」はデータ (data) のようなものだ。OSたる「素養」は、和文脳と漢文脳という二つのパーツから成る。往時、日本の知識人は、いわば二重言語書者であつたわけだ。本来は相性が悪い部分もある二つのパーツを円滑に機能させるための橋渡し役を担うのが「漢文訓読」という方法にほかならない。訓読は、さながら和文脳と漢文脳をつなぐ脳梁のごとき存在だ。

江戸時代、本居宣長が「漢意」の排斥に汲々としたのも、自らの脳裡に組み込まれたOS「漢文脳」の働きを何とか押さえ込もうとしたからだだろう。漢文が単なる教養すなわちアプリの一つにすぎない存在であれば、もっと容易に削除できたはずである。

は、日本の知識人の伝統的な〈知〉の在り方について、「漢文の素養」という言い方を多少なからず目にするからだ。素養は、知識や教養とどのように異なるのか。手っ取り早く愚見を理解してもらうために、一つの英文を見ていただきたい。

Even a child knows it.

ふつうはA「子どもでもそんなことは知っている」くらいに訳すだろう。しかし、B「三尺の童子すら之を知る」と訳すことも可能なはずだ。今、翻訳論には立ち入らない。平明な現代語に改めることこそ翻訳だとの立場から見れば、ただちにBは失格となってしまうだろうが。

私見によれば、件の英文を見たたん、AとBが同等に、場合によってはBのほうが先に脳裡に浮かぶのが漢文の「素養」、まずはAが脳裡に浮かぶが、それをBに変換できるのが漢文の「教養」、そして、

三

もう一つ、知識と教養の二項対立に疑問を抱く理由は、日本における漢文の在り方が、韓国の「教養漢文」と同じになつては困るの思いがあるからだ。韓国の書店で漢文関係の書棚に立ち寄ると、「教養漢文」と題する書籍が目につく。かつて私が購入した書物だけでも、『TV교양한문』(EBS教育放送、一九九四)・高麗大学校漢文学教室「編輯」『教養漢文』(二九四)・方仁泰＋李福撰「編」『教養漢文』(集文堂、一九九六)という具合である。

すでにほぼハングル専用になつた韓国において、漢文は「教養」の二字を冠して受け取るのが当然になつてしまった。これは「なくとも実生活には差し支えないが、あるに越したことはない知識」という意味での消極的な「教養」にすぎない。まさに取って付けたようなアプリとしての「教養」だ。

しかし、韓国とは大いに異なり、今なお大量の漢字・漢語を駆使して日常生活を営んでいる日本で、漢文がこうした腰砕けの「教養」として存在するだけでよいのだろうか。取り外そうと思えば、いつでも取り外し可能なアプリとして漢文を学べば事足りるのか。そうだとすれば、中等教育で漢文を教える



意義もいささか危うくなるだろう。しよせん趣味の一つも同然となれば、ただでさえ忙しい学校で教える余裕なぞナシ、どうぞ個々人で御自由に、となつてしまふに違いない。

このような意味で、漢文を不用意に教養と結びつけるのは危険なのだ。日本の漢文を韓国の「教養漢文」と同一の存在にしてはなるまい。生涯教育という美名に踊らされて、中等教育の彼方にほんやり「豊かな漢文の教養」の実現を夢想するのは、ほとんど責任放棄のへたり込みに近いのである。

四

知識よりも教養を上位に置くのは、決して誤りではない。知識より優位にあるからこそ教養と呼ぶのだろう。しかし、「生徒たちに、知識にとどまらず、教養をも授けてやりたい」という心情は理解できるものの、このような考え方には、どうしても矛盾と不遜の臭気が漂うような気がするのである。

知識は他から授かるものとしても、教養は自ら身につけるものではなからうか。自身の経験に鑑みても、学校その他で習い覚えた知識について、人生のある場面で「こういうことだったのか」と納得する

ときこそ知識が教養に変わる瞬間であり、その素材を与えてくれる点で、知識は実に有り難いものである。逆に言えば、教養は、教わるようなものではなく、また教えられるようなものでもないのだ。

知識という箱のうえに、教養という箱が載っているとイメージするのは錯覚だろう。両者の関係は、知識のなかに教養が位置する包含関係として想い描くのが妥当ではないか。知識のほんの一部が教養になればよいほうだという実体験に照らしめても、両者は透過率のきわめて低い浸透膜で仕切られていると考えるのが穏当であろう。曰く「知識なくして教養なし」、また曰く「教養は知識の中に在り」と。

五

たとえ教養が教えられるものとしても、漢文がますます疎遠な存在となってゆく昨今の情勢において、事実上、教えるのは不可能だというのが偽らざる私見である。何よりも、漢文の教養を教えるには、教える側にそれだけの学力が必要とされるからだ。

試みに、甚だ大ざっぱながら、次のような査定項目を用意し、教員自身が○△×で自らの実力を自己評価してみてもどうだろうか。おおむね易から難へ

と並べたつもりだ。a・e・fについては、「書ける」が○、「書けないが読める」が△、「書けず読めず」が×。b・c・dについては、「使える」が○、「使えないが理解できる」が△、「使えず理解できず」が×である。

- a 漢字（旧字体を含む）
- b 漢語
- c 名言・故事成語
- d 訓読表現
- e 漢文訓読体
- f 漢文（白文）

果たして如何？ 失礼ながら、aからして心もとない思いに囚われるのではないか。さすがにe・fは手に余るという向きが大半を占めるだろう。そうだとすれば、英文が書けず読めずの教員が、生徒たちに英語の教養を身につけさせようとするのと似た話になる。そんなことが許されるだろうか。あまりに傲慢、見方によっては滑稽でさえあるだろう。教室を無自覚な三文喜劇の舞台にしてはなるまい。

六

現今は、ほぼ専一に漢文の学習が可能であった往

時とは異なり、素読やら復文やらを駆使しての漢文のOS化は望めない。我々の脳裡には和文のOSしか存在しないのである。となれば、現行の限られた授業のなかで「国語」の一分野として漢文が位置づけられている以上、漢文は、和文というOSの必須補完アプリとして教えるほかないだろう。

取り敢えずは、いや、何を措いても、返り点を正確に打てる学力を養成し、再読文字の読み方を徹底させることだ。漢字を正しく書けるように指導し、日常に用いる漢語の訓読を手ほどきせねばなるまい。いづれ女子生徒が母親になったとき、子どもを送り迎える車のなかで、「（徐行）ってなに？」と聞かれて、「ゆっくり走る」と答えつつ脳裡に訓読「徐行」が浮かべば、それこそ習い覚えた知識が教養と化し得る瞬間ではなからうか。

名言や故事成語など、漢文の人生教訓を教えるのも結構だ。しかし、漢文で人生教訓を教えようとするのであれば、もはや漢文の領分を逸脱した僻事（ひがこと）しか思えない。漢文は、あくまで言語教育の一環であり、道徳教育のお先棒を担いで善意を押し売りしている暇などありはしないのである。



季節のことばと二十四節気

——教養としての旧暦

おかだ よしろう
一九三〇年生まれ
岡田芳朗

■古典の理解に暦の知識を

「奥の細道」の冒頭には次のような一節があります。

弥生も末の七日、あけぼのの空朧々として、
月是有明にて光をさまれるものから、富士の峰
かすかに見えて、上野、谷中の花の梢またいつ
かはと心細し。

「弥生も末の七日」とは三月の二十七日のことですが、これを読んで「ああ、上野、谷中の桜が満開の三月末に、花を見ながら芭蕉は旅立ったのか」と思われては困ります。この「弥生」は旧暦なので、三月二十七日は新暦ならおおむね四月の末ごろですが、この年の元禄二年（一六八九）は閏正月があったため、特に遅く、新暦の五月十六日でした。芭蕉は葉桜の江戸を後にして、「今度はいつ上野、谷中の桜を見られるか」と思いながら旅立ったのです。

■旧暦とはどのような暦か

旧暦とは明治五年（一八七二）まで日本で使われていたもので、「太陰太陽暦」という暦です。月の満ち欠け（朔望）をもとに日を数えつつ、太陽の運行による一年とのずれが生じないように、「大」の月（三〇日）と「小」の月（二九日）を組み合わせた、閏月を設けたりして調節していました。また、一年を二十四等分した二十四節気^①を設け、太陽の運行による季節感も示しました。月の朔望による暦を「太陰暦」、太陽の運行による暦を「太陽暦」といい、日本の旧暦はその両方を組み合わせたものなので、「太陰太陽暦」なのです。

日本の旧暦を太陰暦だというのはあまり正確ではありません。純粹な太陰暦としてはイスラム暦があり、これは、毎年月日がずれていって、真夏にお正月が来たりすることになります。

①二十四節気 太陽のめぐりによる一年を二十四等分したもの。二分（冬至・夏至・春分・秋分）と四立（立春・立夏・立秋・立冬）を軸として、それぞれの季節にふさわしい名称がついている。

②七十二候 二十四節気の一つの節気をさらに三つに分け、その時期ならではの気象や動植物などの変化を示したもの。東風解凍はるかせこおりをとく（魚上氷うおこおりをいする）など。

③雑節 正しい季節を知らせるために二十四節気を補足するかなちで使われた。『節分』『彼岸』『社日』『土用』『八十八夜』『入梅』『半夏生』『二百十日』『二百二十日』がある。

昨今は一種の「旧暦ブーム」で、書店に行くと「旧暦」を掲げた本がたくさん並んでいます。写真やイラストをふんだんに使った、眺めているだけでも楽しい本が多いようです。ただ、中には解説の内容がやや眉唾めいたものもあります。「旧暦を使うと日本の季節感がよくわかる」といったことを謳い文句にしている本もありますが、「旧暦は日本の季節感にぴったり」という見方は、厳密に言えば間違いです。これは、旧暦イコール二十四節気という誤解からきたものでしょう。

旧暦では年によって月日が異なりますから、それをもとに農作業などをしていては、むしろ季節とずれてしまいます。だから、昔の人は、「春分から何日以内に種をまこう」とか「八十八夜になったら茶摘みだ」などと、二十四節気、七十二候、雑節を目安として暮らしていました。

たしかに、二十四節気は一年を二十四等分したものですので、季節に合うように感じるかもしれません。

■二十四節気は日本の季節にぴったり？

それでは、本当に二十四節気は日本の季節感にぴ

たり合っているでしょうか。立春は二月四日ごろ、立秋は八月七日ごろですが、二月の初めに「春だなあ」「八月の初めに「もう秋だ」と感じるでしょうか？日本列島は南北に長いので、地域によって季節感はかなり異なります。ぴったりだという地域もあるかもしれませんが、そうではない地域も多いでしょう。また、「小満」とか「芒種」などという言葉で、はつきりと季節をイメージできる人はどれほどいるのでしょうか。

二十四節気は、もともとは二五〇〇年ほど前の中国で成立したものです。気候的には日本よりもやや寒く、漢語が使われ、陰陽五行説などの観念的な要素も入り込んでいます。ですから、日本の季節感に合わないかったり、難しい語句があったりするのとは当然なのです。

■二十四節気にもっと親しんでもらうために

昨年、日本気象協会が「日本に合った、新しい二十四節気を作ろう」という企画を打ち出しました。選考委員は私のほか、俳人の長谷川耀さん、日本語学の山口仲美さんら総勢八名。

ところが、「新しい二十四節気を作る」ことには、



気象学											
冬	秋			夏			春			冬	月
12月	11月	10月	9月	8月	7月	6月	5月	4月	3月	2月	1月
除夜の鐘 冬将軍 クリスマス	時雨 木枯らし1号 七五三	秋祭り 紅葉(もみじ)前線 冬支度	虫の声 いわし雲 お月見	朝顔 流れ星 原爆忌(広島と長崎)	夏休み 入道雲 ひまわり 蛭子ぐれ	梅雨 螢舞う あじさい	卯の花 鯉のぼり 風薫る 春眠	花吹雪 入学式	なごり雪 おぼろ月 ひな祭り 春一番	節分 バレンタインデー	初詣 寒稽古 雪おろし
哲学・文学											
冬	秋			夏			春			冬	
冬至 大雪	立冬 小雪	霜降 寒露	秋分 白露	立秋 処暑	大暑 小暑	芒種 夏至	立夏 小満	清明 穀雨	啓蟄 春分	立春 雨水	小寒 大寒
雪が降る 昼がいちばん短いころ	冬の生まれるころ 初雪(はつゆき)	肌寒さを感じる 早霜(はやしも)	露が白々と結ぶ 秋のなかば	秋の生まれるころ 暑さが衰える	暑さが厳しくなる 暑さ極まるころ	麦の熟れるころ 昼がいちばん長いころ	夏の生まれるころ 若葉の輝くころ	穀物が芽吹くころ 麗か(うららか)	地中の虫が目覚める 春のなかば	春の生まれるころ 春の雨が降り始める	寒さが厳しくなる 寒さ極まるころ

委員からも一般からも猛反発が起きました。もともと中国由来のものとはいえ、二十四節気は一四〇〇年以上前から日本で使われ、日本に根付いています。それを変えることなどできるわけはありません。古典文学はもちろん、俳句の季語にもなっていますし、「今日は立春です」などとテレビのニュースでも使われます。難しい言葉、日本の気候とはびつたり合わない言葉ではあっても、そんなことは百も承知で使われ、日本の文化の中に息づいているのです。そこで、「新しい二十四節気を作る」のではなくて、二十四節気を補足し、より親しみをもってもらえるような提案をしよう、ということになりました。それが、「季節のことは三六選」と「二十四節気ひとこと解説」です。

■「季節のことは三六選」と「二十四節気ひとこと解説」
「季節のことは三六選」は、日本気象協会が「あなたが感じる季節のことは」を一般から募集し、応募があった五〇〇〇通を超えるご意見の中から、選考委員が議論を重ねて厳選して決めたものです。毎月三つずつ、おおむね、上旬、中旬、下旬を意識して選びました。七月だけではなくても三つに絞

れず、四つになっています。ですから、題は「三六選」なのですが、実際には三七あります。

伝統的な言葉もあれば、バレンタインデー、クリスマスのようなカタカナ語もあります。現代の日本の季節感にふさわしいものを選ばれたのではないかと思います。十二月には、イルミネーションが有力候補として残ったのですが、イルミネーション自体は一年中あるということで、ぎりぎりで却下されました。そのような議論を経て選びだしたものです。

また、「二十四節気ひとこと解説」は、二十四節気の言葉が難しい、日本の季節感に合わないという声に対して、二十四節気を補足して、現代の日本の文脈に合うようにひとことで解説したものです。原案は俳人の長谷川耀さんが考えてくださいました。だから、きれいな言葉がならんでいるでしょう。それをもとに委員が議論して決めました。

例えば、「春の生まれるころ」。立春は二月四日ごろですから、まだ真冬の寒さです。なぜこんな時期に「春が立つ」のか。それを「春が生まれる」と解釈することで、雪の下で芽吹く植物を想像してみるなど、寒さの最中でも春を感じとる感性に近づくことができるはずです。「立秋」も同様で、八月七日

ごろの暑い盛りではあっても、ほのかに「秋が生まれ」、育ちはじめるのです。

「春の生まれるころ」の「ころ」というのも工夫したところ。今日では、「立春」というと、特定の一日を指すと受け取られることが多いと思いますが、実際には一年の二十四分の一ですから、半月分の長さがあります。「今日は立春です」というときは、立春の最初の日を指しているのです。本来、二十四節気というのは、一定の範囲を指すということ意識してもらいたくて「ころ」としました。

■旧暦ブームの背後にあるもの

二十四節気や七十二候は、旧暦における太陽暦の役割を果たしており、昔の人はそれで季節感を知り、農作業などの目安としました。今日それが見直され、注目が集まっている背景には、季節感の喪失があると思います。

私が子どものころは、イチゴは五月ごろに出回るものでしたが、今やビニールハウス栽培で一年中買えることができます。冷房が普及して夏も涼しく過ごせるようになりました。衣食住のすべてにおいて季節感が失われてきている。だからこそ、逆に季節を



求める心が出てくるのでしょうか。新暦では桃の節句（三月三日）に桃の花は間に合いませんが、旧暦の三月三日（二〇一三年は新暦四月十二日）なら咲いている。七夕は新暦だと梅雨空で星が見えないが、旧暦の七月七日は梅雨が明けた後（二〇一三年は新暦八月一三日）になる。このように、季節の行事を考えるとときにも、旧暦を用いると新暦よりはおおむね、イメージとして合っているとはいえるでしょう。（先述したように、旧暦は年によって月日が変わりますので、「びったり」とはいえないのですが）

冒頭のような古典の理解にしても、生活のなかの四季折々の季節感を味わう上でも、旧暦の教養をもっておくことは大切です。正しい暦の知識をもつことで、日本の季節感を暮らしに生かし、日本の伝統的な文化を豊かに味わうことができるのです。

■教養主義と「これからの教養」

私（昭和五年生まれ）の世代は、教養主義世代と呼ばれてきました。大正教養主義の洗礼を受けた先生方が教壇に立ち、学生たちも教養を競い合う雰囲気がありました。「あの人は教養がない」という言葉は、全人格を否定されるような響きをもっていた

ものです。当時、岩波新書を読む大学生は「お前、新書なんか読んでの？」と軽蔑されました。

今にして思うと、大学生が岩波新書を馬鹿にするのはどうかと思いますが、学生にはそのような気構え、プライドがあったものです。

何をもって教養とするかは、時代によって違うものですが、今を生きる若い人々に、自分でものを考える力を大切にしてほしい、と思います。

私は戦争中に東京で育ちました。昭和二十年の終戦が近づくと、昼も夜も日本の飛行機は見たことがなく、アメリカの飛行機ばかりで、空襲もありました。勝ち目がないことは子どもの目にも明らかなのに、大人たちは、神風が吹くとか負けていないなどと強弁していました。

人間は時代の空気に流されてしまうものです。今のようにありあまる情報があっても、正確に自分の目で見で、自分で判断し、自分の態度を決めていくことは、とても難しい。情報が多すぎてかえって難しいかもしれません。常に「これでいいのか」と疑問をもち、自分の考えをもつことを大事にしてほしいと思います。

（二〇一三年九月三日談、聞き手＝編集部）

大学入試改革と、求められる「教養」としてのリテラシー

しまだ やすゆき
島田 康行

筑波大学人文社会系教授

…入学定員の一部については、高等学校在学期間の成績が非常に優秀なもののなかから、学力検査によることなく、出身学校長から提出される調査書、推せん書に基づき入学させる方法、…などの多様な方法を積極的に取り入れるべきである。

右は、常陸野の地に新大学を創設するにあたって、入試についても新しい構想が練られていたことを示す資料である。出典は「筑波新大学のあり方について―報告―」（筑波新大学創設準備調査会）。昭和四六年七月公表。今から四〇年以上も昔の提言である。大学入試改革は、常に社会の注目を集めるところとなってきた。

平成二四年六月に公表された「社会の期待に応える教育改革の推進」（文部科学大臣 平野博文）は、教育改革の七つのポイントの一つとして大学入試改革

を掲げていた。そこでは「クリティカルシンキングを重視した入試への転換」、「TOEFL等の入試への活用促進」の二点が具体的に言及されている。

同じ時期に公表された「大学改革実行プラン」社会の改革のエンジンとなる大学づくり」（文部科学省）は、改革の方向を「学ぶ意欲と力を測る大学入試への転換」と定めた。そして「高校教育から一貫した質保証へ」「教科の知識偏重の入試から『意欲・能力・適正等の多面的・総合的評価』へ」の二点を目標として掲げ、「センター試験の資格試験的活用の促進」「思考力・判断力・知識の活用力等（クリティカルシンキング等）を問う新たな共通テストの開発」などを、考えられる取組みの例とした。

その後、平成二五年六月に閣議決定された「教育振興基本計画」では、「生徒の学習の到達度を把握するための新たなテストの導入に向けた取組を進め



るとともに、教科・科目の特性を踏まえつつ、技能検定の活用等を促進し、客観的な把握に基づく評価の充実を図る」とされ、また政府の教育再生実行会議（座長・鎌田薫早稲田大学総長）は、高校在学中に複数回受けられる「到達度テスト」の導入を視野に入れた議論を始めたと伝えられている。

多面的な評価によって、学習者の思考力・判断力などを総合的に判定すべしという方向は新しいわけではない。それは冒頭の報告書の記述にも窺われるところであるし、一〇年以上前に国立大学でも導入が始められたAO入試の理念そのものでもある。

今回の改革は、新しい到達度テストとTOEFL等の導入などを中心に議論が進められるようであるが、文相の「社会の期待に応える教育改革の推進」を受けた「大学改革実行プラン」が示す「思考力・判断力・知識の活用力（クリティカルシンキング）」という記述には注目しておきたい。根拠や論拠を吟味して、結論に至る過程を検討し、主体的な判断をする力、とても言おうか。

クリティカルシンキング（批判的思考）の能力は大学で学ぶために欠かせないものである。学習指導要領「国語総合」にもこれに関連するような指導内

容は随所に見いだせる。曰く、「自己評価や相互評価を」「反論を想定して」「出典を明示して」「引用し」「批評する文章を書いたり」等々。これらは批判的思考の具体的な過程の一部とも位置づけ得る。

一般に大学入試は、高校での学習の成果を的確に測定すると同時に、その学習を支援するようなものであることが望ましい。右に述べたような学習の成果を適切に評価し、その学習を促すような方法が模索されていくのは自然な流れでもあろう。

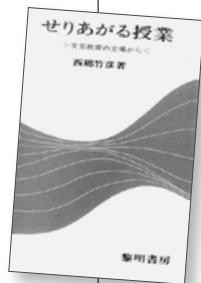
国立教育政策研究所が継続的に実施してきた「特定の課題に関する調査」は、従来、毎年一つの教科について一つのテーマを取り上げて大規模調査を行うものであったが、平成二三年度、前例を破り、初めて教科の枠を超える内容で実施された。そのテーマは「論理的な思考」であった（実際の問題と結果の分析はすべてweb上で確認できる）。

筋道を立てて考え、その筋道を的確に表現したり、その筋道を吟味したりする力、またそうしようとする態度は、これからの「文化的な言語生活」に欠かせない「教養」である。今後の大学入試改革の流れの中で、いっそう重視されていく可能性は大にあると思われる。

読んできた本、 読んでほしい本 ④

よこい まちこ
横井 真知子

愛知県立刈谷高等学校



西郷竹彦 著

『せりあがる授業』（黎明書房、一九七五）

■詩や小説の授業のために

「先生、文章って自由に感じてどのように読んでほしいし、答えは一つじゃないんだよね」と口々に生徒たちは言う。文章とは全く異なった方向で意見を述べる生徒に、評論ならば、さまざまな角度から論理的に説明すると生徒たちは納得するのだが、詩や小説となると一体どうしたらいいのか。

これが二十代の私の悩みであった。私には大切にしている詩集が多くあり、自分でも詩を作ったりしていたのだが、教科書の詩が分からないという生徒に解説をして、「あなたのように考えることもできるけれど、でも、…」と誤魔化す自分をどうにかできないものかと困っていたのである。そんなとき、一冊の本と出会った。

『せりあがる授業』——そこには、教師が分かっていることを生徒に何らかの方法で分からせるにすぎない「分かる授業」「発見学習」ではなく、教師自身も授業の中で何かを発見し、喜びをともにする授業のあり方が書かれていた。何よりも実践の記録であることが若い教師の支えとなる。

私はその中から最初に若山牧水「白鳥の歌」の授業をした。まず、「シラトリ」であって「ハクチョウ」ではないこと。「や」の文法的用法。「かなし」は「悲し」ではなく、古語であることとその様々な意味。「染まず」の本来の用法、等。これはこの本で言うところの「たしかめよみ」である。さらにその後の、「多様に出た解釈をぶつけ合い（略）それらを越えてより少しでも高い次元の解釈へ、せりあがってゆくこと」

を実践するのは、その豊かさや深さという点において難しいことであった。「文芸の形象をよむ」重要性にも気づかされたが、言語に対する勉強不足を突きつけられ、日本語の力のないままに勘違いをして授業を行っていたことに愕然とした。

また、この本を読んだ者は、生徒が「必要な、望ましい体験」ができるような作品の探求、及び、努力を自分にも課すことになる。それは、ただ作品を読んでいるだけでは不可能であり、社会と深く関わろうとする中で得られるものだ。

文芸の本質は人間を「根っこから培っていく」ということである。教師が期待する答えを分らせて言わせようとするだけの授業にたいする戒めを、今回、久しぶりに読み直して再確認したのであった。

本コーナーでは、毎回、全国のさまざまな先生方よりオススメの本をご紹介します。

教材研究の実際(3)

―「矛盾」の授業に向けて②

塚田 勝郎
筑波大学付属高等学校教諭

前回(「WEB国語教室」に掲載)は、教育実習で漢文入門期の授業を担当する大学生という立場を想定し、教材研究のアウトラインを説明しました。今回はさらに踏み込み、語句の意味や句法等、授業を展開するための実践的な教材研究について述べることにします。教材は、前回に引き続き『韓非子』の「矛盾」です。

語句の意味を調べる

教材研究は教材の音読から始まります。教室で範読する時に、つかえながらでは生徒の信頼を得られません。また、音読することで、語句の読みや意味がはっきりしない箇所をあぶり出すことができます。

説明の便宜のために、送り仮名を省いた「矛盾」の本文を掲げ、漢和辞典や注釈書で確認すべき語句を傍線で示します。

楚人有鬻盾与矛者。誉之曰、「吾盾之堅、莫能陷也。」又誉其矛曰、「吾矛之利、於物無不陷也。」或曰、「以子之矛陷子之盾、何如？」其人弗能应也。(韓非子)

調べる語句が多くあって、驚く方があるかもしれませんが。しかし、最低限これくらいは読みと意味を調べておかないと、授業を進めるのに支障があります。本稿ではすべての語について触れる余裕がありませんので、代表的な二つの語句について、教材研究のポイントを示します。

○楚人 教科書(ここでは大修館書店の『国語総合 古典編』を用います)には、「楚」は、春秋・戦国時代の国名。訓読では、国名の下「人」は、習慣的に「ひと」と読む。という注があります。生徒のレベルではこれで十分かもしれませんが、指導する側としてはもう少し詳しく知っておく必要があります。漢和辞典を引いてみましょう。

国名。周の成王のとき、熊繹の封ぜられた国で、春秋の初め、王を称し、長江中流の地域を領有した。後、戦国時代の七雄の一つとなる。四十一代、五百余年で、秦に滅ばされた。(『前漢書』(鎌田正・米山寅太郎著『新漢語林 第二版』二〇一一年、大修館書店))

この記述で注目すべきは、「長江中流の地域を領有した」という箇所です。教科書や漢和辞典には必ず「戦国時代閩連地図」等の名称で戦国時代の地図が載っていますから、楚の国の位置を確認してみましょう。戦国の七雄の中で楚一国が南に偏って位置していることに気づくはずですが、司馬遼太郎の小説『項羽と劉邦』(新潮社、一九八〇年)には、次のような興味深い一節があります。

「江南」と、のちによばれる揚子江以南の地は、この

時代(紀元前二百年代)、北方の中原(黄河流域)のひとびとからは、異国めいた地域としてみられ、そこにいるひとびと(呉とか越、あるいは楚)は、異民族とみられていたにおいがある。(『中略』)古代、中原では、江南の連中のことを蛮族とし、「荆蛮」とよんでいた。荆一字だけでも、その地域をあらわす。

『韓非子』の作者韓非は、中原の国である韓の王族です。韓非の優越感が、「矛盾」という寓話の設定に反映していることは疑いない事実と思われます。これと同様に、『韓非子』の「株を守る」の寓話では宋人が、また「履を買ふに度を忘る」の寓話では鄭人が主人公に設定されています。ここでも、周に滅ばされた宋の遺民や韓に敗れた鄭の民に対する軽侮の念が見て取れます。

先に引用した『項羽と劉邦』の記述に類した説明は、多くの注釈書でも見ることができます。ここまでの知識を教室で生徒に示す必要はありませんが、このような情報を得ることによって、それまで気づかなかった面白さが発見でき、教材研究にさらに身が入るにちがいありません。

「楚人」の「人」を「ひと」と字訓で読むことは、忘れずに授業で強調しましょう。中には、なぜ「ひと」と読むのかと疑問を持ち、質問する生徒がいるかもしれません。

それに対しては、「昔からの読み癖、習慣で、国名の下は『ひと』と読むことになっている。」と説明すれば十分ですが、場合によっては次のような説を紹介してもよいでしょう。

地名、国名などの下の「人」の字は、「ひと」と訓で読む習慣になっている。その国の人という意で、熟語や人名ではないことをはっきりさせるためであろう。(漢詩・漢文教材研究会編『故事・寓話Ⅰ』『漢詩・漢文解釈講座』第16巻、一九九五年、昌平社)

○之「誉」之の「之」についても漢和辞典で読みと意味をしっかりと調べておきたいものです。漢和辞典の中には『新漢語林』のように助字の解説を囲み記事にしているものがある、便利です。また、教科書にも「助字一覧」等の名称で付録が設けられているものがありますから、教科書は授業で扱う部分だけでなく、少なくとも漢文編全体と巻末付録には目を通しておきましょう。

筆者の経験では、漢文入門期の生徒は「之」の読みと書き下し方に苦労するようです。指導者自身が確実な知識を身につけると同時に、生徒にわかりやすく説明する工夫も必要になります。次に示すのは、板書の一例です。

●「之」の読みと意味、書き下し方
誉^レ之^レ曰、〈これ〉これ。之^レを誉^ほめて曰はく、吾盾^レ之堅、〈の〉…の。吾^わが盾^{かた}の堅きこと、以^レ三^子之^レ矛^レ陷^三三^子之^レ盾、〈の〉…の。
子^しの矛^{はこ}を以^{もつ}て子^しの盾^{たて}を陷^{とほ}さば、

句法を確認する

この教材で確認すべき句法は、次の四項目です。

- A 莫^レ能^レ陷^一也。(否定)
- B 無^レ不^レ陷^一也。(二重否定)
- C 以^三子^之矛^レ陷^三三^子之^レ盾、何^レ如^一。(疑問)
- D 其^レ人^レ弗^レ能^レ応^一也。(否定)

AとDは、「莫は無と同じ。」「弗は不と同じ。」という教科書の脚注程度の説明で、多くの生徒は納得するでしょう。またBも、英語の授業で得た知識も利用して、「突き通さないものはない。(＝何でも突き通す。)」と理解させるのは容易でしょう。

これに対して、「何如」は難度が一気に上がります。指

導する側は、漢和辞典の巻末付録にある「句法一覧」や句法を集約した書籍等を用いて、正確な理解を得ておきたい

ものです。『漢文語法ハンドブック』(江連隆著、一九九七年、大修館書店)や『語法・句法』(國金海二著、研究資料漢文学10、一九九二年、明治書院)は、説明が詳しく、一冊持っていると重宝します。簡便なものでは、『漢文学習ハンドブック』(田部井文雄他共著、一九九〇年、大修館書店)の「基本句形」と「主要助字」の項目が充実しています。

学校によっては、生徒全員に「要覧」や「図説」という名のついた資料集を購入させています。その場合には、必ず授業に用意させ、句法の確認に役立たせたいものです。また、先ほども触れましたが、教科書巻末付録の「句法一覧」のページも活用しましょう。

参考文献と指導書の関係

ここまでお読みになって、「どうして便利な指導書の存在に触れないのだろうか。」という疑問をお持ちになった方もあるにちがいません。それに対しては、筆者は次のようにお答えします。

この連載の第八回以降は、教育実習を控えた大学生を対象としています。彼らは指導書と無縁であり、参考文献探しから教育実習の準備を始めてほしいという筆者の願いも

込められています。

同時に、本稿をお読みになる若い先生方への「指導書だけに頼らずに教材研究を積み重ねてほしい。」というメッセージも込めたつもりです。筆者も四〇年近く教員生活を続けてきましたので、現場の忙しさは十分に承知しています。また、漢文プロパーの教員が激減していることも肌身に感じています。指導書の役割は、たとえて言えば、サブリやエナジードリンクのようなものです。忙しくて明日の授業の準備が間に合わない時には、指導書が役に立つでしょう。しかし、時間的に余裕がある時には、参考文献と指導書を併用して、手間暇をかけて教材研究を積んでほしい。これが若い先生方へのメッセージです。

筆者が高校生の頃に、ある先生が「勉強は本を買うことから始まる。」と語ったことが今でも耳に残っています。若い先生方にとっても「教材研究は本を買うことから始まる」はずです。この連載では次回以降も、手に入れやすい参考文献を少しずつ紹介していく予定です。

今回触れることができなかった「矛盾」の現代語訳、授業計画、板書、発問事項等については、回を改めて述べたいと思います。

この連載は大修館HP内「WEB国語教室」でも読むことができます。次回は「WEB国語教室」に11月頃アップする予定です。

1 学校制度と進学状況

中華人民共和国の学校教育制度は、一九八六年に「中華人民共和国義務教育法」が制定、小学校・初級中学の九年義務教育が法制化され、幼稚園・小学校・初級中学（初中）・高級中学（高中）・大学を基本としている点では、修学年数を含めて日本とほとんど変わらない。しかし、母語も異なる少数民族の多い自治区等においては、財政的な問題も絡んで義務教育の小学校・初級中学の九年間以外の学校の建設や教員の養成が遅れており、「第十二次国民経済及び社会発展五か年計画要綱」（二〇一〇～二〇一五年）における教育発展のための重要プロジェクトの取り組みの一つになっている。同時に、後期中等教育に関しては、普通高中以外の選択肢としての職業教育を振興するための行動計画も二〇一〇年に策定され、取り組みが始まっている。後期中等教育の普通高中生と中等職業学校生の割合は、二〇一一年段階で、普通高中がやや多いもののおよそ半々程度になっている。なお、進学率は、二〇一一年の小学校から初中が98・3%、初中から後期中等教育が88・9%になっている。二〇〇〇年のそれぞれ、94・9%、51・2%と比べると、後期中等教育への進学率が飛躍的に伸びてきている。

なることを承知の上で、一日の時間割例を示すと、表1のようになる。目の疲れをとるための体操が組み込まれているのは全国的な特徴である。

3 普通高級中学の教育課程

最初にも触れたように、後期中等教育は、職業教育が半数を超えそうな勢いで充実してきているところではあるが、我が国の普通科高等学校教育との比較のために、普通高中の教育課程と語文の位置づけを取り上げることとする。

我が国の学習指導要領に相当する「普通高中語文課程標準（実験）」が二〇〇三年に発表され、二〇〇四年秋から実験が行われている。「普通高中課程方案（実験）」によれば、八つの学習領域、12～13科目の一つとして「語文」が設けられており、三年間で必修116単位中の10単位が当てられている。2単位は、10週を基本に、週4時間9週の36時間の授業と復習考查からなっている。卒業には、必修116単位と选修28単位が必要になる。

語文の必修は、必修一から必修五までを高ひと高二で履修し、「読解と鑑賞」「表現と交流」の二分野を総合的に扱うことになっている。選修には、「詩歌と散文」「小説と観劇」「ニュースと伝記」「言語文字応用」「文化論著講読」の五系列がある。選

〔WEB国語教室〕運動

世界の「国語」教育事情第5回 中華人民共和国

田中 智生 岡山大学

学習指導要領に当たる「義務教育課程標準」の存在や、九年間の義務教育、教科書検定など、日本と似たところもある中国の教育制度。「国語」に当たる科目「語文」の具体的な内容・構成を、実際の教科書の様子もふまえて紹介します。

2 義務教育における語文

制度としての義務教育は、全国的にほぼ整い、我が国における学習指導要領に相当する（「各科」）義務教育課程標準も二〇一一年に改訂が行われ、質的な充実段階に入ってきている。

しかし、日本の場合と異なって、教育課程を中央政府と地方政府及び学校の三者が管理することになっており、地方政府、学校にそれぞれ裁量部分を残している。「義務教育課程設置実験方案」には、九年間の教科構成とそれぞれの教科に配当する単位時間数が、九年間を通じた総時間数における割合として示されている。それによると、「語文（我が国の国語に相当）」に配当される時間数は、総時間数9522時間の20%～22%となっている。これを地方政府レベルが各学年に割り振って実施されている。直轄市である北京市の場合、小学校一年から順に週当たり、8866666556、上海市の場合は、9966664444となっている。一単位時間自体も北京市の40分（小学校）↓45分（中学）に対して上海市は35分↓40分と異なる。北京市の方を一般的な例と見るべきであろう。学制では、九年義務教育は徹底してきたが、六・三制を主としながら五・四制もまだ存在している。以上のように、地方や学校によって実施状況が大きく異

8:00～8:30 (30分)	朝の読書、朝の会*
8:30～8:45 (15分)	朝の体操**
8:50～9:30 (40分)	1時間目
9:40～10:20 (40分)	2時間目
10:20～10:25 (5分)	目の体操
10:35～11:15 (40分)	3時間目
昼休み	
13:00～13:40 (40分)	4時間目
13:40～13:45 (5分)	目の体操
13:55～14:35 (40分)	5時間目
14:45～15:25 (40分)	6時間目
15:30～16:00 (30分)	課外活動

表1…ある小学校の時間割（江蘇省）
※毎週月曜日は、8:00～8:15は朝の読書、8:15～8:45は国旗掲揚式となる。
※夏季と冬季で始業時間や昼休み時間を変更する学校もある。注5

4 普通高中教科書「語文」(必修)の内容構成

中華人民共和国の教科書は現在検定制をとっており、地方・学校の状況に応じた採用ができるようになっているが、代表的なものとして、人民教育出版社版の「語文」を中心に、内容構成を紹介する。必修の一～五は、それぞれ一冊の教科書になっており、各冊100頁前後からなっている。

『語文』（必修）は、「読解と鑑賞」「表現と交流」「整理探究」「名著への誘い」の四部から構成されており、「名著への誘い」だけが、課外学習用で、前三つの部分は、授業で扱うことになっている。「読解と鑑賞」の部は、各冊4単元からなっており、第一単元が現代文学の鑑賞、第二単元が古典文学の鑑賞、第三単元が論理的文章の読解、第四単元が報道や講演、自然科学の論文等を対象にした交流と運用で括られている。各単元に3～4教材が用意されており、各冊12～13教材が用意されている。

第一冊の場合を次頁に例示する。

1 現代詩歌・情感と形象

毛沢東の詩、艾青の「大堰河」など

2 古代叙事散文・深い意味の抽出

「春秋左氏伝」、「史記」（鴻門の会）など

3 現代散文・人と文の吟味

魯迅の「劉和珍君の記念に」、巴金の隨想など ※魯迅の作品は多く教材化

4 報道記事と報告文学・要約と評価

たまたま、第一冊には漢詩がないが、他の冊には、杜甫や陶淵明、李商隠など多く取り上げられ、小学校から通して相当数に上る。

「表現と交流」の部は、作文と口頭コミュニケーションの二分野を含む。作文は、各冊四つのテーマで構成されているが、「読解と鑑賞」とは違い、第一冊・二冊で、記叙・描写の基本を、第三冊・第四冊で議論文を中心にし、第五冊は総合的な深まりを求める内容で構成されている。口頭コミュニケーションは、第一冊から順に、朗誦、スピーチ、討論、弁論、インタビューを取り上げている。「整理探究」の部は、各冊三つのテーマで構成されている。例えば、「美しい漢字」「奇妙な対句」「ロジックと語文学習」「映像文化」「古代文化常識」「趣のある翻訳」など、我が国の「言語事項」

PRC



では括れない内容を含んでいる。

以上、第一冊の場合、19教材を36時間の授業で扱うことになっている。「読解と鑑賞」の教材について言えば、精読教材1教材につき長編であつても2〜3時間扱いが標準で、略読教材に指定されているものは1時間扱いになっている。教材ごとの中心指導内容が限定されている現れである。

注1現在、二〇〇六年に改正されたものが適用。

注2中華人民共和国教育部ホームページ「統計数据」の「高中階段学生数的構成」による。

注3同前「各級学校卒業生昇学率」による。

注4二〇一三年一月の「教育部二〇一三年工作要点」によれば、修訂することになっているが、本稿段階では、二〇一一年のものに基づいている。

注5財団法人自治体国際化協会「CLAIR REPORT NUMBER 32」二〇〇八年五月「中国の義務教育」による。

注6「教育部關於印發『普通高中課程方案（実験）』和語文等十五個学科課程標準（実験）的通知」二〇〇三年三月による。

注7言語と文学、数学、人文と社会、科学、技術、芸術、芸術、体育と健康、総合実践活動の八つの学習領域。

注8語文、数学、外語（英語、日語、ロシア語等）、思想政治、歴史、地理、物理、化学、生物、芸術（音楽、美術、体育と健康、技術等）13科目。

この連載は大修館HP内「WEB国語教室」でも読むことができます。次回は韓国の教育事情について「WEB国語教室」に11月11日にアップする予定です。



Q 古典の授業で、生徒の興味を引き出すための工夫は？

古典に関連する近代以降の文章が教科書に取り上げられるなど、「伝統的な言語文化」に興味・関心を持たせる取り組みが求められています。生徒から古典に対する興味・関心を引き出すための授業のヒントはないでしょうか。

島根県・38才女性、他

A にし かす お 西一夫

信州大学教授

従来の指導方法だけでは、新たに盛り込まれた「伝統的な言語文化」を意識した教材を扱うことに困難を感じるかもしれない。ですが、学習指導要領では「内容の取り扱い」で近代以降の文章を含めることが明示されました。しかも小学校から古典に触れる機会が増えたことで、教材化やその扱いにも見直しがはかれました。ここでは

改訂によって三校種で多く取り上げられている『枕草子』（春はあけぼの）での活用法を紹介します。

『新編国語総合』（国総314、大修館書店）では「春はあけぼの」全文を見開きで示し、原文を上段に、下段に山口仲美さんの斬新な訳文が示されます。生徒のなかには複数回学んできた者もいるでしょうから、内容理解はある程度できていると考えられます。この教材で注目させたいのは本文と訳文との関係です。清少納言の文体を生かしながら、それが現代語訳にどのように反映

しているかを考えさせることです。例えば、「春は夜明け！」と冒頭を体言止めにする感覚を意識させて訳文の工夫に着目させることが、古典に興味・関心を持たせることにつながります。余分な情報と考えられがちな訳文を積極的に活用することがポイントです。

また「なんてステキな光景なの！」と題する文章は、古典鑑賞の手がかりを与えてくれます。つまり、興味・関心を広げるきっかけである古典を鑑賞する態度を育てることにあります。山口さんは『源氏物語』に優れた風景描写を取り上げて、『源氏物語』に影響を与えた可能性を推測しています。個々の作品を読むだけでなく、解説文を読んで作品の相互関係を考えることは、個人のものの方・感じ方・考え方を深めるきっかけになるはずです。

近代以降の文章や口語訳は、古典を読む観点やおもしろさを生徒に伝えるために有効に活用できる存在なのです。

このコーナーでは、国語科にまつわる疑問・質問に、大修館の教科書編集委員が親身にお答えしていきます。質問は小社「国語教室Q&A係」まで。

一緒にやろうよ、国語教育^{※1}

——言語教育への誘い

おおつゆき
お
大津 由紀雄

明海大学教授 慶應義塾大学名誉教授

◆「文法ぎらい」な子どもたち

調査したわけではありませんが、国語の時間に習う文法が好きだという子どもはさほど多くないと思います。実際、小学校で習った文法がさっぱりわからず、中学校で英語を習うときも「文法」と聞いただけで苦手意識を持ってしまったという話もよく耳にします。

国語の時間に習う文法に興味を覚えられない理由はかなりはつきりしているのではないのでしょうか。《日本語は母語なのだから、改めて文法など習わなくても日本語は使える。なのに、どうして「主語」だとか「名詞」「動詞」だとか「修飾」だとかという、訳のわからない文法用語を使って、文法というものを習わなくてはいけないのか。》ひとことと言ってしまえば、文法学習の意味と「ご利益」がわからない、ということなのです。

筆者は認知科学の研究者で、主として、母語の獲得を支える、こころの仕組みとその働きについて考えてきましたが、この十五年ほどは言語教育についても積極的に発言しています。実際、小学生たちとことばを素材にいろいろな活動をしています。

そうした活動の中で、わたくしは教育に「ことば」という視点（日本語とか、英語とか、スワヒリ語とか、日本語とか、といった個別言語の垣根を超えて、それらを鳥瞰する視点）を導入することが重要だと考えるようになりました。以下、例を挙げて解説します。

◆ことばのあいまい性

(1) のように、ある文が二つ以上の解釈に対応する場合、その性質を「あいまい性 (ambiguity)」と呼びます。

- (1) 健太郎は自転車で逃げた泥棒を追いかけた。
(自転車に乗っているのは健太郎、それとも、泥棒？)
- (2) あいまい性はどの個別言語にも見られます。英語の例を挙げましょう。

(2) John saw a girl with binoculars.

(双眼鏡を持っているのはジョン、それとも、女の子？)

ことばはコミュニケーションの道具としても使われますので、ことばがあいまい性を許すということは注意を要します。誤解が生じる可能性があるからです。

そうした事態を避けるためには、まず、(1) が誤解を生む可能性を持った文である（あいまい性を持つ）ことを認識する必要があります。その上で自分の伝えたいと思っている解釈が相手に一義的に伝わるように工夫しなくてはなりません。

- (1) であれば、ポーズを「自転車で」の前に置く（書きことばであれば、読点を打つ）か、後に置くかで、解釈を一つに絞らせることができます。
 - (3) 健太郎は、自転車で逃げた泥棒を追いかけた。
 - (4) 健太郎は自転車で、逃げた泥棒を追いかけた。
- さらに工夫を凝らして、語順を変えするという方法を採用することもできます。
- (5) 自転車で逃げた泥棒を健太郎は追いかけた。

- (6) 自転車で健太郎は泥棒を追いかけた。
- (6) の文頭の部分が多少きこちなく感じられるのであれば、(7) のようにすることもできます。

(7) 自転車で乗って、健太郎は泥棒を追いかけた。

◆文の骨格を考える

ここで、どうして(1) があいまい性を持つのかについて考えましょう。(1) の骨格は(8) のようになっています。

(8) 健太郎は「逃げた」泥棒を追いかけた。

「」に入れた部分は連体修飾節です。つまり、(1) は全体の文（主文）の中に、節（その本性は文）が埋め込まれた構造になっているのです。

そして、(1) では(8) の「健太郎は」という主文の要素から「逃げた」という連体修飾節に移る、ちょうどそのはざまに「自転車で」が現れます。そこで、その「自転車で」を主文の一部と考えるのか、連体修飾節の一部と考えるのか、二つの可能性が出てきます。

(9) のように従属節の一部と考えれば、自転車で乗っているのは泥棒となります。

(9) 健太郎は「自転車で逃げた」泥棒を追いかけた。
また、(10) のように主文の一部と考えれば、自転車で乗っているのは健太郎となります。

(10) 健太郎は自転車で「逃げた」泥棒を追いかけた。

さきほど、(1)のあいまい性を除去する可能性として最初に挙げた、ポーズを置いたり、読点を打ったりする方法は、それによって、意図しているのが(9)なのか、(10)のかを明確にしようという試みであったのです。

◆母語を利用する強み

教育において母語を利用する強みはなんと言っても直感が利くことです。(1)があいまい性を持つこと、(3)～(6)のような工夫を凝らすとそのあいまい性を除去できることなどについても確かな直感が働きます。この直感を利用して、母語の仕組みと働きに気づかせることこそが文法教育の真骨頂だと筆者は考えます。

右では文の構造という形式的な面だけからの説明になっていますが、そこで出てくる構造的な特徴は、修飾表現と被修飾表現は同じ節に属さなくてはならないということです。

このような例を利用することによって、文法というのは、知らなくてもいいことを面倒な文法用語を使って理屈っぽく説明するためのものであるという子どもたちの思いを払拭させ、文法について知っておくことはことばを効果的に利用するのに大いに役立つのだということを実感させることができます。

さらに、右の例示のなかで利用されているのは、子ども

け」がいつも上位を占め、「怪獣」「犬」などが続きます。

ひとわり意見が出たところで、「こんなのかな?」と言って、()の中に「病氣」と書き入れます。すると、一呼吸あって、「あゝ」という、こうとでも表すしかないような声が教室に響きわたります。気づきの瞬間です。

最初に挙げた例は、みな、「こわい目をした」という意味のもので、形の点では「こわい」と「目」でまずまとまりを作り、その上に「の()」を重ねたものです。それに対して、「こわい目の病氣」は「目の病氣がこわい」と言っているのですから、まず、「目」と「病氣」がまとまりを作り、その上に「こわい」が重なっているのです。

つまり、最初に子どもたちが考えた例と「病氣」の例は語の並び(語順)としては同じなのですが、どうやって語のまとまりを作り、さらに、そのまとまりに新たな語を加えてより大きなまとまりを作っていくかという点で違っているのです。

「あゝ」体験をした子どもたちはさらにいろいろなことに気づきます。

(12) こわい 目の おぼけ

というのは、「こわい目をしたおぼけ」という意味にもなりますが、ゲゲゲの鬼太郎の目玉おやじのような、目のおぼけ、それがこわいという意味にもなる、つまり、(12)はあいまい性を持っているということに気づく子どももいます。

たちが無意識のうちに持っている母語の知識とそれに対する気づきである点にも注目してください。すべては子どもたち自身の中(おそらく、脳でしょう)に備わっているのです。子どもたちに、実は、自分たちは母語の豊かな知識を持っているということに気づかせる。先生がたはその支援をするという役目を担うというわけです。相手に問いかけながら、相手にさまざまなことを気づかせてしまうというソクラテスのような存在です。

念のために付け加えておくと、筆者は右で書いたようなことをそのまま教室で展開すべきだと言っているのではありません。これはあくまで素材です。その素材をどのように料理して、教室で展開させるかは、その道のプロである先生がたの領分です。

◆子どもたちとのやりとり

ここで、筆者が小学生を対象に開いた「ことばワークショップ」でのやりとりの一例をご紹介します。

まず、

(11) こわい 目の ()

と板書します(実際は、切れ目ごとに改行して、3行にします)。

そして、()の中になにか単語を入れて、意味の通じる日本語にして欲しいと言います。「お母さん」「先生」「おば

すべて母語に対する直感だけで進められる作業です。で、子どもたちも想像力を発揮して、ことばの世界を飛び回ります。^{*2}

◆2つの窓からことばを眺める

このような実践からおわかりいただけるように、筆者は、国語教育と英語教育は別のもではなく、母語と外国語という二つの窓からことばを眺めることによって、ことばの性質に対する理解を深めるという教育プロジェクトとして捉えることができると考えています。

昨年、一般社団法人「ことばの教育」という組織を作ったのも、いま述べた考え方の進展と普及を図るためです。関心を持っていたら、ぜひ法人のウェブサイトをご覧ください。そして、言語教育、一緒にやりましょう!

<http://kotobanokyoku.blog.fc2.com/>
<https://www.facebook.com/kotobano.kyoku/>

※1 『JaNe』 第六〇号(二〇一二年一月、スリーエーネットワーク)に「一緒にやろうよ、日本語教育」というエッセイを寄稿しました。今回はその姉妹編です。

※2 このエッセイで書いた考え方をより詳しくお知らせになりたい方は大津由紀雄・窪園晴夫「ことばの力を育む」(二〇〇八年、慶應義塾大学出版会)をご覧ください。

堀辰雄『風立ちぬ』再読

わたなべ まみ
渡部 麻実

天理大学文学部准教授

——「いざ生きめやも」を問い直す

一 リルケ的生死観と『風立ちぬ』

二〇一三年七月二〇日、宮崎駿原作・脚本・監督による映画『風立ちぬ』が公開された。タイトルをその小説から採られ、「堀越二郎と堀辰雄に敬意を表して」とポスターその他に名前を掲げられた堀辰雄（一九〇四～一九五三）の没後六〇年は、まさしくメモリアルな年となった。

『風立ちぬ』（野田書房、一九六四）は、堀の婚約時代および婚約者矢野綾子の死に取材した小説で、「序曲」「春」「風立ちぬ」「冬」「死のかげの谷」の五章から成る。各章は一九三六年二月以降、『改造』『文藝春秋』等に、独立した小品として発表されたものだが、「冬」までがいずれも、

三六年末から翌春にかけて集中的に発表されたのに対し、「死のかげの谷」（『新潮』一九六三）のみ、発表までにさらに一年を要した。こうした事情は、『風立ちぬ』の小説内世界にも共通しており、中心人物である作家の「私」も、婚約者節子の死後、彼女をヒロインとする作中作の創作が続行不能になる。そして、人気の絶えた真冬の避暑地で節子の死をかみしめながら、作中作の完成に腐心する。死によって幕を下ろされた婚約生活を、幸福な男女の物語として結晶し、節子の鎮魂を果たそうとする努力は困難をきわめ、「私」は切ないほど傷つき、孤独にもがき続ける。

そんな「私」はやがて、オーストリアの詩人、ライナー・マリア・リルケの詩集『レクイエム』を手にし、共に生き

続けることを切望するあまり、節子の死を容認できずにいた自分を、激しく悔いる。

けふも一日中、（略）リルケの「レクイエム」に向つてゐた。未だにお前を静かに死なせておかうとはせず、にお前を求めてやまなかつた、自分の女々しい心に何か後悔に似たものをはげしく感じながら……

（死者達が……引用者注）噂とは似つかず、非常に確信的で、／死んでゐる事にもすぐ慣れ、頗る快活であるらしいのに／驚いてゐる位だ。只お前——お前だけは帰つて来た。お前は私を掠め、まはりやさ迷ひ、何物かに／衝き当る、そしてそれがお前のために音を立てて、／お前を裏切るのだ。（略）帰つて入らつしやるな。さうしてもしお前に我慢できたら、／死者達の間に死んでお出。死者にもたと仕事はある。／けれども私に助力はしてくれ、お前の気を散らさない程度で、／屢々遠くのものに私に助力をしてくれるやうに——私の裡で。（死のかげの谷）

〈生〉と〈死〉を二分法的に解さず、連続・循環するものと見なすリルケの死生観との出会いにより、ついに「私」は再起する。小説『風立ちぬ』が、末期の節子の描写に付した日付は、堀の実人生における綾子との永訣の日付に一

致する。それを慮るとき、小説でありながら死者の鎮魂について、あくまで現実的に果たさねばならなかった、そしてそれゆえに厳しい孤独のなかでの一年を必要とした、そういう『風立ちぬ』が内部に抱え持つ峻厳な闘いに、思いを馳せずにはいられない。

二 「いざ生きめやも」をめぐる誤訳問題

節子の病状が深刻になり過ぎる前、二人の明るい未来を夢見ることも可能であった恋の季節のなかで、中心人物「私」が好んで口ずさんでいた「風立ちぬ、いざ生きめやも」は、ポール・ヴァレリーの詩「海辺の墓地」の一節『Le vent se lève, il faut tenter de vivre』（風が立つ、生きることを試みねばならぬ）に由来する。『風立ちぬ』における「生きめやも」もおおむね、それと同様の意味、すなわち「生きねばならぬ」というような〈生〉を志向する決意に満ちた言葉として把握されてきた。しかしそのように解釈すると、「生きめやも」は大きな誤謬を孕むことになる。基本的には上代の語法である「めやも」は、「～しようか、いやしまい」という意の反語だからだ。これに関連して『風立ちぬ』の誤訳を指摘したものに、例えば以下のやり取りがある。

丸谷 「生きめやも」というのは、生きようか、いや、

断じて生きない、死のうということになるわけですね。
（略）つまりこれは結果的には誤訳なんです。「やも」の用法を堀は知らなかったんでしょ。

大野 こういう訳をするようでは堀さんは日本語の古典語の力はあまりなかったと思います。（大野晋・丸谷才一『日本語で一番大事なもの』中央公論社、一九七・三）

右の指摘は、『読売新聞』の「編集手帳」欄（三〇〇四・七・二五）にも引用され、少なからず流布することとなった。しかしこれは、必ずしも正鵠を射てはいない。『風立ちぬ』の完成に前後する頃から堀は、『万葉集』に没入してゆく。その挽歌に見られる古代人の死生観に、リルケと同種のものを見出したためだ。『万葉集』関連の堀の蔵書には、膨大な書込みが施されている。そしてそうした書込みは、「めやも」を含む複数の歌にも及んでいる。一例を挙げてみよう。鞆の浦の石の裡うちの木。見む毎に、相見し妹は 忘れえめやも（大伴旅人、『万葉集』巻三、四四七）

堀の座右の書、折口信夫『國文口譯叢書第三篇萬葉集上』（文會堂書店、一九六・九）は右の歌を、「鞆の浦の岩浜に生えてゐる裡うちの木を、これから後も見る度毎に、一処に眺めた妻をば、忘れる事は出来はすまい」と訳している。堀の『万葉集』受容は、折口や武田祐吉らの複数の現代語訳や文法解説を繙読しつつ、きわめて丁寧に行われているので、仮に

『風立ちぬ』執筆中に「めやも」に関する文法上の知識を持ち合わせていなかったとしても、その後も一貫して知らないままであったということはあり得ない。代表作『風立ちぬ』は生前、幾度か刊行し直されている。「いざ生きめやも」が、文法に疎かったために引き起こされた単なる誤訳に過ぎないなら、それがそのままの形で残された理由は説明し難い。「めやも」を誤訳と論断する前に、反語表現「めやも」であることの必然性を検討すべきだろう。

三 風渡る『風立ちぬ』

「いざ生きめやも」が、「さあ生きよう、いやそうはしない」ではなく、「さあ生きよう」の意であるとしたら、小説『風立ちぬ』にふさわしい標語足り得るのだろうか。たしかにそれなら、喪失の悲しみを乗り越えて再起を果たす「私」の物語にはふさわしい。しかしそれでは、〈生〉の持続を望みながら人生の半ばで斃れた、愛する者の魂は救えない。稿者はこの点にこそ、「生きめやも」である必然性が存すると考えている。〈生〉と〈死〉を二項対立的に捉え、幸福の要件としての〈生〉に拘泥し、〈死〉を不幸そのものとし、か認識できないかぎり、愛しい者に対し、静かな〈死〉を許すこと、その短すぎる生涯が、たしかに持っているはずの意味を心底から了解することは、不可能なのだ。「生

きねばならぬ」というような殊更な決意を手放し、生きられるだけの生を生き抜くことに、虚飾なき価値を認めること。リルケを通過してそれが可能になったとき、「私」は〈生〉に向き直り、絶望を背にして一步を踏み出し、節子の鎮魂を果たすことができたのではないか。それを裏づけるように、『風立ちぬ』の結末では、非常に奇妙な現象が起きている。

「風立ちぬ、いざ生きめやも」の典拠であるヴァレリー「海辺の墓地」の邦訳を、堀と交流のあった矢内原伊作の仕事から引用してみよう。

風が吹く！……生きねばならぬ！／広大な大気は私の本を開いては閉じ、／波は飛沫となつて岩に碎ける！
（略）／風が吹くー吹かねば死なねばならないであらう。（矢内原伊作『海辺の墓地』ポール・ヴァレリー小論）

このように、生きようとする決意が吹く風を前提とするなら、『風立ちぬ』の「私」は「死なねばならない」。なぜなら、「此処だけは、谷の向う側はあんなにも風がざわめいてゐるといふのに、本当に静かだ」というように、『風立ちぬ』は結末で、風を吹き止ませているからだ。「海辺の墓地」とは対照的に、その末尾が差し出すのは、風渡った静穏な光景だ。恋に彩られた生の横溢と歓び、病に脅かさ

れる心のざわめき、節子の死がもたらした立ち上がりかねるほどの絶望……。そうした激情の果てに「私」が辿りつく静謐は、吹く風ではなく、風が吹かないことに支えられているのだ。

『風立ちぬ』は、婚約者を失って絶望した青年が、吹く風に促されて、「さあ生きよう」と再起を決する、ナイーブでどこかエゴイステイックな小説ではない。これは、若くして死なねばならなかった、愛する節子の〈生〉と〈死〉、その短い生涯を悲劇で終わらせず、幸福な物語として結晶させること、そういう仕事を厳格に課し、愛しい夭折者の鎮魂を果たそうとした、峻厳なる物語なのだ。

生きることを巡る可能性は、かつてに比べ格段に広がっている。だが、生きられることと生きやすいことは同一ではない。生きられるのに生きにくさを感じている人は、むしろ増えているかもしれない。だとすれば我々一人一人が、よりよく生きること、若かりし日の堀辰雄風に言えば、「苦痛に充ちた人生のなかをどうしたら快適に散歩しつづけて行けるか」、宮崎駿の言葉を借りるなら、「力を尽くして生きなさい」という課題について、もっと真剣に考えてみるべきではないだろうか。たとえば、そうした課題との対峙そのものであった、堀辰雄の文学を借りることによって。

「芥川」の段 私解

「夜の明く」ということ

こばやし たかあき
小林 賢章

同志社女子大学表象文化学部教授

『伊勢物語』の六段「芥川」は高校の教科書でも取り上げられ、古典作品中最も有名な話柄の一つである。

男が嵐の中、女をさらって、芥川のほとりの廃屋で、まだ行く先も長いからと、女を奥にいれ、自分は門口に弓・胡縁の武器で守っている。男はその時、「はや夜も明けなむ」と口にする。当たり前のことだが、この部分を全ての注釈書は「早く夜も明けてほしい」と口語訳している。実はこれが、問題なのであった。

話は少し遠回りになるが、当時の時刻制度とその時間に対する意識について概略を述べる。

- ①当時の時刻制度は定時法であった。
- ②一日の中、日付変更時点は、丑の刻と寅の刻の間(午

であり、特に暁の開始時分(暁方)は一年中真っ暗である。

以上のようなことは当時の文学を知る常識として知っておいてもらいたい。

「芥川」の話にもだろう。「はや夜も明けなむ」の中に動詞「明く」がある。和歌などで「明けぬれど」「明けぬなり」などという句があると、③の理由から「午前三時になったけれど」「午前三時になったようだ」のように口語訳しなければならぬ。だが、従来は夜が明けたと口語訳されてきた。とすると、この「夜も明けなむ」も「早く午前三時になってほしい」と口語訳すべきことになる。ただ、この「芥川」の句では、「夜」を主語とし、「明く」が述語になっている。こういう場合も、そう言えるのかは、少し検討がいる。次の和歌を見られたい。

夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづこに月宿らん

これは『百人一首』にもとられる有名な和歌だが、従来この和歌は、「明るくなった」と間違った解釈が行われてきた。ところが、この歌の『古今和歌集』の詞書には、「月

前三時)であった。

「寅一点者為^ス当日時刻之始^ト」(『教訓抄』)など

- ③その三時になることを、動詞「明く」で表現した。

「とらのかひふくほどにおまへにまゐりて、かかる事なむさぶらひつるときこえさすれば、あけがたになりぬるかとのたまはせて」(『大斎院前御集』)など

- ④当時の幽霊の活動時間は午前三時までだった。それ以降は人間の活動時間だった。

- ⑤午前三時以降午前五時までが暁という時間帯だった。「五夜ハ五更ナリ^ア暁ナリ」(『朗詠注』)など

- ⑥暁は一年の半分は真っ暗だが、春の半ばから秋の半ばまでは、一部明るい時間も生じる。

- ⑦ただ、午前三時からほぼ午前四時までは一年中真っ暗

の美しかりける夜、暁方によめる」とある。暁方は暁の始まりを指す語だった。口語訳するなら「午前三時過ぎ」であろうか。午前三時なら、日本国中真っ暗である。それなのに、「夏の夜」が「明け」ているのである。「夜が明く」も日付が変わったと口語訳しなければならぬ理由となる。実はこの事実は、「有明の月」の解釈について、もっと大きな意味を持っている。有明の月は一般に「夜が明けても空に残っている月」と口語訳される。最近ではその口語訳に矛盾がある用例がたくさんあるので、「夜が明けかけるころの月」「夜が明けようとするころの月」など、近年の古語辞典では微妙な言い方をするようになったが、それはまさに微妙であった。

それでは、どうして有明の月は「夜が明けて空に残る月」と解釈がつけられたのだろうか。顕昭(平安鎌倉期の歌人の歌学書『袖中抄』に、「下旬をおしなべて在明、大かたは十四五日より月いらぬさきに夜のおくるをば在明と云けれど、くはしくいへば廿日の後を云ふべきにや。」の記事があるからである。「大かた」は「だいたい」の所」の意味、「くはしく」は「こと細かに言え」である。それらの語さえ理解できれば、右文の大概の意味は理解できよう。「大かたは十四五日より月いらぬさきに夜のおくるをば在明と云けれど」が今日の古語辞典にそのまま採用されたことこ

こに説明するまでもなからう。この注釈にも「夜の明く」が使われていた。

古くから暁と有明の月の関連性が強いことが指摘されていた。平安時代の和歌を見ると、詞書に「暁」とあると、三分の一程の和歌の中に有明が使われていたからで、使用率第一位だった（ちなみに、二位はあかつきで20%ほど）。有明の月は暁のものであったのである。暁は午前三時以降だから、有明も午前三時以降のものであったのである。とすると、『袖中抄』の「夜の明く」も午前三時を意味していたことになる。以下、「夜の明く」が午前三時になる意味を証する用例は多いが、省略に従う。

右の事実がわかると④と関連して興味深い事実が指摘できる。これも有名な『大和物語』の百四十七段「生田川」で、武器を貸した旅人に今までの話をして、いた墓中の人物が「夜もあけにければ、人もなし」と表現されている。墓中の人物はもちろん幽霊である。幽霊など異界のものは、この午前三時に、異界に戻らなければならなかったのである。『伊勢物語』に戻ろう。男は、「はや夜も明けなむ」と思っていた。なぜか。「鬼はや一口に食ひてけり」がその答えである。男は、化け物（鬼）を予想し、早く午前三時になってほしいと思っていたのである。

実は、その時間的事実を裏書きする事実がもう一つある。

く」まで部屋の中を見ていないはずである。そして、「夜が明けて（午前三時になって）」部屋の中を見た様子が、「やうやう夜も明けゆくに見れば率て来し女もなし。」だった。『伊勢物語』の話の推移を見てみよう。もし、「はや夜も明けなむ」が今日の夜が明けると同じ意味なら、夜が明けてから部屋の中を見るはずである。それなのに、まだ暗い時間「やうやう夜も明けゆく（暁）」時間に部屋を覗いたことになる。男は、自分が言った時間の来る前に部屋の中を覗いてしまうことになってしまう。

「夜も明けなむ」は午前三時になってほしいの意味だった。そう理解して、本文を見てみると面白いことに気がつく。男は「鬼ある所としらで」廃屋に女を据える。ところが、「はや夜も明けなむ」と言う言葉で、既に鬼への恐れを意識していたことになる。そこで、女がいなくなれば、鬼の仕業となるのだった。

丑の刻と寅の刻の間（午前三時）は日付の変更時点だった。その時点は、④の意味、午前三時までが冥界であり、それ以降が人間界であると、当時理解されていた。益田勝実は、論文「黎明」（『火山列島の思想』所収）の中で薄暮が鬼と人間の交代時間であると述べていた。だが、実際には、「鬼は」既二暁二成ヌラムト思フ程ニ、（中略）立テ飛ビ去ヌ。」（『今昔物語集』巻十二第三十八話）。「年来ノ事ヲ

女が食われた後、「やうやう夜も明けゆくに、見れば率て来し女もなし。」の部分である。右の「あけゆく」も暁と関連する語であった。

166 にはとりならぬねにてもきこえけり あけゆく時は我もなきにき かへし

167 あか月のねざめのみ、にき、しかど とりよりほかにこゑもきこえず（『伊勢集』）

は贈答歌である。「あけゆく時」は「あか月」のほずである。

しはすのつごもりがたに、あかつきおきてみれば、月いりかたになれば
491 としくれて明行空を詠れば のこれるつきのかげぞ恋しき（『和泉式部集』）

これも、詞書に「あかつき」とあり、和歌に「明行」とある。こうした用例を捜すのは、それほど難しいことではない。「明けゆく」という語は、暁と結びついて使用されている。

「やうやう夜も明けゆくに」は暁（暗い）と同意だった。男の行動は「はや夜も明けなむと思ひつゝるたりけるに、鬼はや一口に食ひてけり。」と書かれているから、「夜が明

終夜談ジテ、暁二成テ、（中略）仙人其ノ烟ニ乗テゾ空ニ昇ニケル。」（『月』巻十三第三話）などのように、鬼の類はまだ真つ暗な午前三時に退場していた。

平安時代文学で、「明けぬれば」などの動詞「明く」は午前三時になる意味だと述べてきた。ここで、さらに、「夜が明く」のように、主語に「夜」を、述語に「明く」を持つ表現も同意であることを述べた。

主語に「夜」を、述語に「明く」を持つ表現、「夜は明く」「夜も明く」「夜明く」などを「ヨノ阿克表現」と呼ぶと、ヨノ阿克表現は、『伊勢物語』『大和物語』『平仲物語』などの平安初期の作品に多く見られる。そして、平安後期になると、和歌を除くとほとんど見られなくなる表現である。とすると、動詞「明く」の単独の用法は、ヨノ阿克表現の省略形ではないかと想像がつく。

「夜もすがら」「夜一夜」「夜をこめて」「今夜（今宵）」などの語の終了時点は、全て午前三時である。そこには、「夜」の終了時点が午前三時という意識があったのではない。ヨノ阿克表現の背後の問題である。そしてそのことがヨノ阿克表現を生んだと言えよう。

その国語史的事実はともかく、今後、平安時代初期の作品に、動詞阿克やヨノ阿克表現を見たときは、午前三時になる意味と考えるてはならないのだった。

夜 (よ／よる) が明ける

「夜」を「よ」と読むか、「よる」と読むかの区別は、思いのほか難しい問題です。例えば、明治期までは、

- ・木の下闇茂りあひて夜る行がごとし (芭蕉・おくの細道)
- ・何の夜るでは有り知れる事か (一葉・うもれ木)
- ・夜る十五六人で隊を組んで (漱石・野分)

など、「よる」と読ませるときは「夜る」のように、送りがない(?)をつけている例が多数見つかることから、それが推測されます。書き手が「よる」の思いで「夜」と書いても、「よ」と読まれることはしばしば起こったでしょう。逆もまた真なり、です。とはいえ、大体の読み分けの法則性があり、まず複合語は、上についても下についても九割九分までが「よ」だと言えます (このことから、「よ」から「よる」が派生したと考えられます)。

- ・夜明かし・夜明け・夜遊び・夜嵐・夜風・夜汽車・夜霧・夜桜・夜寒・夜露・夜釣り・夜通し・夜とぎ・夜中・夜長・夜泣き・夜なべ・夜な夜な・夜逃げ・夜更かし・夜更け・夜道・夜店・小夜曲・雨夜・幾夜・おぼろ夜・霜夜・月夜・常夜・短夜・やみ夜・夜々

など、すべて「よ」と読み、どこもなく優雅な響きがあります。「夜顔 (⇩昼顔)」「夜昼なく」「(寄席などの) 夜席」など、対語「昼」と対比的に使ったり、「夜夜中」のように強調して使ったりするときは、例外的に「よる」となります。

慣用句など、各語の結びつきの強いものも、「夜も日も明けない」「夜を明かす」「夜を徹する」「夜を日に継ぐ」「夜を籠めて」など、「よ」と読むのが一般的ですが、「夜も昼も働さずくめだ」「夜となく昼となく」など「昼」と対比的に使うときは「よる」となります。これは、複合語の場合と同様です。

- ・苦しくも長い夜が明けた。

なども、「よる」となることが多いでしょう。「夜・明ける」の結びつきが相対的に弱く、「夜」がより独立的である時には、「よる」と言うのが一般的なのではないでしょうか。そのことは、「夜、けたたましくサイレンがなった」「次の日の夜、事件は起こった」など、副詞的に (独立的に) 使う「夜」は、「よる」と言うのが一般的であることもつながります。なお、「夜が更ける」についても、「夜が明ける」と同じようなことが言えます。

「夜が来る」「夜になる」「夜が深まる」「夜が長くなる」といった、夜の出現や状態の変化を表す表現では、心の奥で対語「昼」が意識されるせいか、「よる」とは言っても「よ」とはならないようです。しかし、「夜が明ける」や「夜が更ける」は、右のような事情で「よ」「よる」ともに用いられているのでしよう。

鳥飼 浩二

『明鏡国語辞典』編集委員

標題の「夜が明ける」も、「夜・明ける」の結びつきが強く、名詞形「夜明^{よあ}け」と呼応するかのように、「よ」と言っていました。現在も、

- ・夜が明けたら出発だ。
- ・全員で夜が明けるのを待った。
- などは、「よ」と読むのが一般的です。ところが、

- ・夜は静かに明けていった。
- ・談笑しているうちに、すっかり夜も明けた。

など、助詞「は」でとりたてたり、「も」で何らかの気分を添えたりするときは、「よ」「よる」ともに言いますが、現在では「よる」の方が優勢ではないでしょうか (これらは「明ける」が連用修飾語を受ける例でもあります)。連体修飾語を冠した、

「ガチャガチャした色の階調／諧調」とは何か ——「檸檬」の本文について——

粕井 均
かすい ひとし
大阪府立夕陽丘高等学校教諭

梶井基次郎の「檸檬」は定番教材の一つとして、今も多くの現代文教科書に掲載されています（平成二五年度使用教科書では6社8冊）。ところが教科書会社によって作品本文（テキスト）に違いがあります。もちろん「檸檬」に限らず、教材化にあたっては表記を一般的なものにするために、原文の漢字を改めたり、仮名書きにしたりするのは当然なされるべき処置とされています。同一作品でも細部のテキストが教科書によってまちまちであることは、教科書を少し読み比べてみたことのある人なら知るところです。ただ「檸檬」には、少数ながら、表記の違いが作品イメージや解釈とかわる箇所があり、教室で本文を丁寧に読

み解いていくうえで注意すべきかと思えます。小稿ではそのうち重要な二箇所を指摘して、問題を提起します。

冒頭二番目の段落の第二文に、次の箇所があります。（風景にしても壊れなかった街だとか、（中略）が好きであった。）（c社の現代文教科書。神経を病んだ〈私〉が、好みが変わったことを述懐している場面です。ところで右の本文では〈壊れ〉は当然〈こわれ〉と音読することになります。ところが大修館版の『精選現代文改訂版』には〈壊れ〉とルビが振ってあります。この特別な読み方は何に依拠するのか溯って調べてみると、一九三一年五月に武蔵野書院から

刊行された初版本の『檸檬』（以下、初版本と略記）にこのルビが付いていました。初出の雑誌『青空』創刊号（一九二五年一月。以下、初出誌と略記）では、全編を通じてルビは二箇所だけでした（〈快速調〉と〈鑑屋〉）。一方初版本では〈不吉な〉を初め難読でないものにまで、ルビが多数付いています。この〈壊れなかった街〉という表現はもう一度出てきて、初版本ではここにも〈くづ〉（旧かな）とルビを振っていますから、推敲ミスや誤植の可能性は少なく、〈壊れなかった街〉と読むべきでしょう。実は二箇所の〈壊れなかった街〉の間には、〈土塀が崩れていた〉という表現もあります（初版本では〈崩れ〉とルビ）。五百五十字

ほどの間に、〈くずれ〉が三回出てくるのですが、土塀の〈崩〉に対して、街は〈壊〉と使い分ける作者の詩人的な語感を生徒に気付かせたいものです。

では、〈くずれ〉とルビのについている教科書と無いのがあるのは、なぜでしょうか。教科書が本文を取っている底本が違うからです。

文学作品を教科書に掲載する場合、作家の個人全集があれば、それが依るべき本文の第一候補になるでしょう。各社ともに筑摩書房の『梶井基次郎全集』によったことを明記しています。梶井の『全集』と名のものは戦前戦後何度か出ていますが、本稿に関係する筑摩書房発行の全集は二種類あります。一九五九年に出版され一九六六年に再版されたものと、一九九九年に刊行されたものとです。前者を旧全集、後者を新全集と呼ぶことにします（他に八六年刊のちくま文庫版『梶井基次郎全集』全一卷がある。これは六六年版の本文を底本に、新字新かなに改めたもので、振り仮名は独自に付けている。例えば〈興がらせた〉に〈おもしろ〉と振り、〈壊れかった街〉にはルビがない。『全集』を

称するが収録は作品と習作、遺稿だけで、ノートや書簡は収めず、詳しい校訂方針や校異も記されない。旧全集は、梶井の友人で、初版本『檸檬』の校正実務を病床の梶井の指示で行い、以後、六峰書房版や高桐書院版の全集編集を担当した淀野隆三が、その仕事の総仕上げを目指したものでした。一方新全集は近代文学研究者の視点で本文から見直したといえます。詳細は略しますが、『檸檬』の本文は、旧全集がルビを付けない初出誌の形態に近く、新全集は初版本を底本にしているの、本文に違いが生まれています。ですから旧全集に基づいた教科書を読んでもいれば〈壊れなかった街〉は抵抗感なく過ぎてしましますが、一九九九年刊行の新全集から本文を取った教科書を使っている教室では〈壊れ〉と読むことで問題を発見することができそうです（ちなみに一九九九年刊の全集によると書いてあるにもかかわらず、他の箇所の相違から、本文は旧全集に基づいているとみられる教科書があります）。なお、新潮文庫や岩波文庫など流布本の多くは、新全集の出る前から刊行されていて、〈壊れ〉というルビは付けていません。

〈くずす〉という語に關していえば、もう一箇所出てきます。結末に近いところ、丸善に入った〈私〉は、〈画本〉（美術画集）を積み上げ、それを〈慌しく潰し〉、また慌しく築き上げた（初出誌本文）とあります。この〈潰し〉に初版本では〈くづし〉という読みが示されています（旧全集はルビなし、新全集はルビつき）。すなわち初版本では、〈くずす〉という語が〈壊〉〈崩〉〈潰〉の三字に使い分けられていたのです。教科書を比べると、原文に忠実な〈潰し〉は大修館1社だけで、〈崩し〉が2社、〈くずし〉〈潰し〉〈つぶし〉がそれぞれ1社でした（現在発行されている新潮文庫では〈潰し〉）。

小稿でとりあげるもう一語は、終盤、積み上げた画本の上に檸檬を置く場面に出てきます。（見わたすと、その檸檬の色彩はガチャガチャした色の階調をひっそりと紡錘形の身体の中へ吸収してしまつて、カーンと冴えかえつていた。）（新全集本文を常用字体、現代仮名づかいに改める。この〈階調〉とは何か。『日本国語大辞典』（小学館）では初版や第二版には載っていない、二〇〇六

年刊の精選版にいたって初めて取り上げられた語です。〈写真・テレビの画像における濃淡の変化の度合い。グラデーション〉とあります。用例としてあげられているのは一九四八年の印刷関係の文献です。

しかし筆者の見た教科書で「階調」と表記しているのは2社だけで、他の4社の教科書では「諧調」です。旧全集の表記が「諧調」になっているのと同様です（流布本の多くも「諧調」）。実は初出誌も初版本も「階調」でした。淀野隆三が数度の全集編集過程で「諧調」に改めたのです。それを新全集は「階調」に戻しました。

『日本国語大辞典』に「諧調」は「文章、音楽、絵画などで調和のよくとれた調子。物事の組み合わせや対照や変化の仕方などから生じる、気持ちのよい調子。ハーモニー」とあり、現代の辞書では「階調」と「諧調」で意味が全く異なります。

戦前の国語辞書を見ますと、『大日本国語辞典』『言泉』『大言海』にはどちらの語も出ていませんが、平凡社の『大辞典』（一九三四年）に「諧調」だけが載っています。〈修辭字用語。耳に快く響くやうな語を選

かも初版本でも「諧調」であつたかのように扱っている〉。

この例を見れば梶井は明らかに「諧調」の意味で「階調」と書いています。「冬の蠅」では本文を校訂し、「檸檬」では著者の表記を残した新全集の処理にも問題があります。

では「階調」＝「諧調」と解した「ガチャガチャした色の階調」とはどういう意味か。問題の部分を少し前から読み直してみましよう。

棚に並ぶさまざまな色の画集を引き抜いた〈私〉は、本の色彩をゴチャゴチャに積みあげて、一度この檸檬で試してみたら、と考え、〈手当たりしだいに積みあげ、また慌しく潰し、また慌しく築きあげ〉ます。〈その度に赤くなったり青くなったり〉してやっと出来あがった〈幻想的な城〉の上に、いよいよ檸檬を置きます。すると〈その檸檬の色彩はガチャガチャした色の階調／諧調をひっそりと紡錘形の身体の中へ吸収してしま〉うのです。（一般的な教科書表記）
「階調」＝グラデーションというほど段階的に濃淡が変化しているはずはなく、か

み、読みよく、聞きよく、整へること。また美学上、調和・律奏等の意で美的対象の形式についてもいえる。戦後の『広辞苑』になると「諧調」が初版（一九五五年）からあり、「階調」は三版（一九八三年）で初めて（gradation）写真印画・テレビ画像などにおける濃淡の変化の度合。として収録されました。漢語としては、『大漢和辞典』（大修館）に「諧調」が（○）やはらぎととのふ。①ころよいしらべ。とあり、「階調」はありません。『日本国語大辞典』の「諧調」の用例の一つ、田山花袋の一九〇三年の文章は、「諧」はにんべんの「偕」になっていますが、音楽での気持ちのよい調子といったものです（「諧」も「偕」もやわらぐという意味がある）。また大杉栄の有名な言葉「美は乱調にあり、諧調は偽りなり」は、出典の「生の拡充」を収めた「正義を求める心」（一九二二年アルス刊）では「階調」はもはや美ではない。美はただ乱調にある。階調は偽りである。となっています。戦前には「諧調」の意味で「階調」や「偕調」と書かれることがあったよう（注）です。

しかし淀野は「階調」を「諧調」の誤記

いって「諧調」＝ハーモニーというように心地よい調和ともいいがたいです。積み上げた本は全体として「ゴチャゴチャ」「ガチャガチャした」色彩です。それを檸檬一つが「紡錘形の身体の中へ吸収してしまつた」というところにポイントがあると思います。「画集の重たいのを」何度も引き抜いたり、つけ加えたりした末に出来た「幻想的な城」には、あるまとまりがあるという意味で「階調」＝「諧調」という語を使ったのではないでしょう。前述のノートには「雑然」と積み重ねた、〈雑多な色の階調〉と書いています。段階的な色彩の変化ではなく、〈ガチャガチャ〉＝雑然と色が混在している状態です。〈ガチャガチャした色の諧調〉＝快い調和と釈ると、「山月記」の「臆病な自尊心」〈尊大な羞恥心〉ではないですが、語義矛盾になります。けれど色は雑多ながら、欧米からの輸入洋書という一つの雰囲気をもって画集は積み重なっています。その上に置いた、絵の具をしぼり出して固めたような「檸檬」。一顆のレモンは「積み重ねた本の群」によく対峙し、支配し（「吸収」、緊迫感をもたらす）（周囲へは変に緊

ないし誤植と考えて校訂したと推測できます（旧全集巻末の「編者註」では諸本を改めたとは記しているが、理由は書いていない）。一方「階調」に戻した新全集の「解題」には、次のように書かれています（筑摩書房旧版全集で「色の諧調」と訂正されたが、「諧調」は和らぎ整う意で、「ガチャガチャした色の諧調」ではそぐわない。段階のある色の調子ととり、「階調」のままとした）。しかし梶井がこのように意識し使い分けていたか、疑問です。「檸檬」の草稿「瀬山の話」でも、その前段階「ノート 第三帖」でも、新全集では「階調」になっています。

「階調／諧調」という語は「冬の蠅」にも出てきます。〈元来一つ物に一つの色彩が固有してゐるといふ譯（わけ）のものではない。だから私はそれをも偽瞞（いつはり）と云ふのではない。しかし直射光線には偏頗（へんぱ）があり、一つの物象の色をその周囲の色との正しい階調から破つてしまふのである〉。（初版本「檸檬」）。ところがこれを新旧の全集ともに、「諧調」に改めています（旧全集では校訂したこと自体に触れず、新全集は「檸檬」の項で「ハーモニー」の意で、「諧調」でよい。とだけ記し、あた

張し）、〈カーンと冴えかえっていた〉。

「ガチャガチャした色の階調」を「雑然」としてゐるがまとまりがあり、どこか調和も感じさせる色調、と私は解釈します。それは「赤や黄のオールドコロンのオールドキニ」。洒落た切子細工や典雅なロココ趣味の浮模（うきも）様を持った琥珀色やひすい色の香水壺。煙管、小刀、石鹼、煙草」（現代表記にした初版本本文）の並ぶ丸善そのものの姿でもありました。

*注1 逆に「階調」の意味で「諧調」と書いている戦前の例もある。（しばらくすると明子が茶色を諧調とした着物にまつ黒の帯をしめた、彼女らしい好みを見せた恰好で出てきた）（『濤川驍』「鳶」）
『龍潭寺』昭和十三年六月 竹村書房発行

*注2 行方不明になっていた「瀬山の話」の原稿が発見されたことがニュースになった（『読売新聞』平成二十四年三月一七日）。この草稿での表記を確認したい。

二 聴席 落語で楽しむ古典文学

井口守著

落語作家・国語科教諭の著者が、おなじみの古文・漢文教材を落語化！授業の導入や振り返り学習に最適です。四六判・並製・二五八ページ 予価 七〇〇円＋税 〈近刊〉 大修館書店

佐野幹 著

「山月記」はなぜ国民教材となったのか



四六判・並製・三二四頁
定価Ⅱ本体二〇〇円十税

評者Ⅱ高木まさき
横浜国立大学教育人間科学部教授

本書は「山月記」の受容を追うことで、歴史的・社会的な状況が、どのように授業の読みと関わっているかを明らかにした上で、新たな授業づくりのヒントをも提供してくれる書物である。読み物としても、知的な好奇心を満たしてくれる。

膨大な先行研究の緻密な調査を基に、「山月記」が「国民教材」となっていくプロセスとそこで生じた様々な問題を明確に描き出している。またその語り口は、読み手の推論を促し、読む楽しみを満たしてくれる。特に

「人間性欠如説」の発端とされる増淵恒吉の授業を組上に載せた第3章や「国語」が「現代国語」と「古典」とに分離し、

国語の授業が読解指導に偏っていく様子を分析した第4章は、スリリングな展開になっている。一方「付録」に収録された「授業実践のヒント20選」では、言語活動に焦点をあてた優れた実践例が紹介されている。新学習指導要領に対応した授業を構想する上で助けになる。授業をより良くしたいと願う先生方にぜひ読んでいただきたい一書だ。

入部明子 著

パワー・ライティング入門



A5判・並製・一四四頁
定価Ⅱ本体一八〇円十税

評者Ⅱ広瀬 実

考えてみると、学校ほどさまざまな種類の文書が飛び交っているところはないのではないだろうか。生徒のノートや小論文はもちろん、廊下に溢れる様々な掲示物。先生方にして、校長への報告書や保護者への通知文等、授業以外の文書作成に日々頭を悩ませているという話をよく耳にする。

こうした多種多様な文書を、効率よく、しかも読み手を引きつける説得力のある文章に仕立てる方法が、本書の「パワー・ライティング」である。

筆者はNHKラジオ講座でパワー・ライティングを使った小論文指導を行っていたので、おなじみの方も多からう。

使用頻度の高い二〇種の文例と解説付きで、困ったときの虎の巻にもなり、ありがたい。

中村修也 著

戦国茶の湯倶楽部



四六判・並製・二五六頁
定価Ⅱ本体一七〇円十税

評者Ⅱ石塚 修
筑波大学人文社会科学系准教授

国語教育とは直接的に関わる著作ではありませんが、「伝統的な」日本文化そのものを理解するうえで外すことのできない茶の湯について、茶の湯史研究の第一人者が、門外漢や初心者にもわかりやすいように茶の湯に関係する人物を中心に解説している本です。「倶楽部」という命名もそこに由来しているのかもしれないませんが、読み進めるにつれ、茶の湯にたしなみのない人でも、ともに楽しめるという意味がひそかに込められているような気がしてきました。

たとえば、千利休の本名は田中与四郎ですが、なぜ「千」と言われるのかとか、かの有名な豊臣秀吉が催した北野大茶会はなぜ一日で終わったのかなど、茶道愛好者でなくても知っておきたいことを豊富なイラストとともに教えてくれます。

いま秋葉原で外国人に人気のおみやげは、「抹茶風味」のお菓子とのこと。「マッチャ」ブームに乗りおくれいているのは日本人だけなのかもしれません。忙中閑有り。たまには一服しながらの読書なさってみませんか。

札埜和男 著

法廷はことばの教室や！——傍聴センセイ裁判録



四六判・並製・二〇〇頁
定価Ⅱ本体一三〇円十税

評者Ⅱ品川 樹

そのもののズバリの書名である。筆者は大阪弁についての著書もある現役の高校国語教師。ふとしたことから裁判に興味をもち、傍聴を重ね、法曹関係者に取材し、「法と方言」をテーマに博士号を取得。その研究の過程で出会ったエピソードが一般向けの書籍にまとまった。

戦後の混乱期、「これからは、見つからんように闇(闇取引)やれよ」と被告人に伝えた裁判官。「ウチナヤ、ニホンヤガヤ」(沖縄は日本ではないのか)と琉球方言で叫んだ被告人。日本語と韓

国語のはざままで揺れる心を詩にする在日二世の法廷通訳人……。その他、法医学者、刑務官、調停委員等々、法に関わる多彩な立場の人々が登場する。

たしかに、裁判ほど人と言葉の関係を生々しく突きつけられる現場はめったにない。法廷は、言葉を学ぶ格好の教室なのだ。

その思いを自ら実践したのが、最終章の高校生模擬裁判選手権。筆者は勤務校を六回優勝に導いた指導者でもある。国語科はもって法教育に関心をもつべきかもしれない。

新課程用
教科書に
完全対応

最新の情報を盛り込んだ
国語便覧の決定版!

平成
26
年度用

国語便覧
ビジュアルカラー



大修館書店

B5判・オールカラー・496ページ

予価＝本体880円＋税

大修館書店編集部〔編〕

古典文学編

見やすく分かりやすく！ 古典の世界をビジュアルに再現。

・古典の基礎知識がひと目で分かる！ **新発想の図解と模型。**

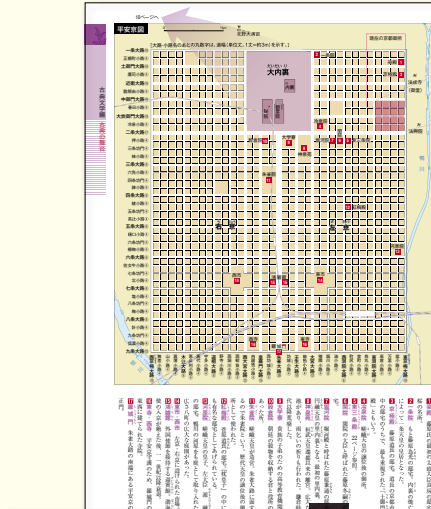
・『源氏物語』を大特集。『百人一首』には必須の知識をもれなく収録。

・文学史の流れと要点が一望できる「古典文学の流れ」「主な作品一覧」。

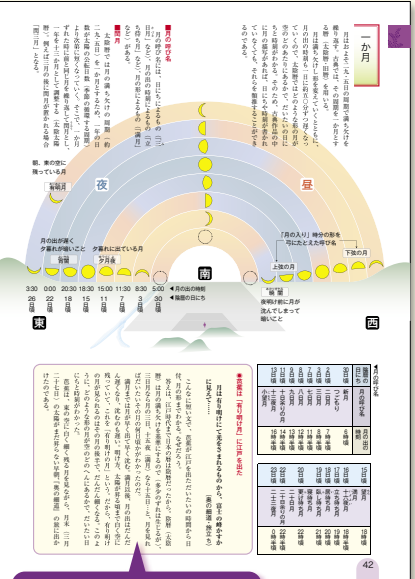
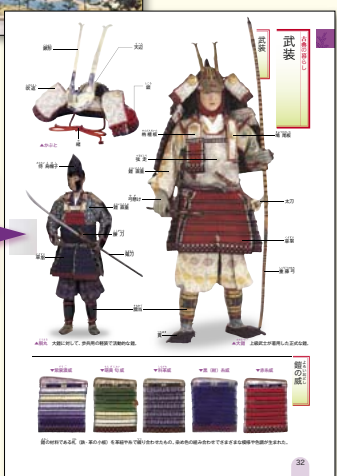
・楽しく作品を学べる「アプローチ」「読みどころ」「Close up」。



模型や図解を多用しビジュアル世代の生徒にも無理なく理解できるよう配慮。



資料写真はメリハリをつけて見やすく紹介。



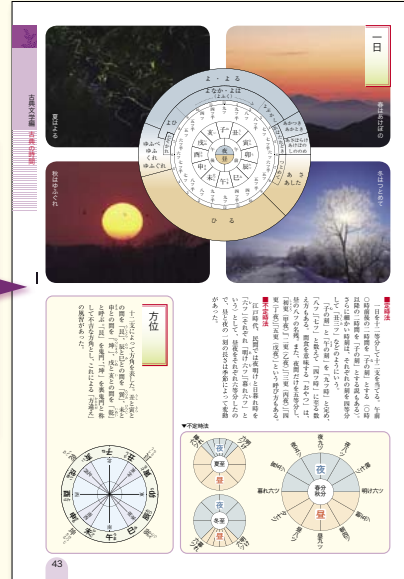
暗記ではなく作品に即して古典の世界が理解できるコラムを適宜配置。

重要作品には現代語訳付きの原文をピックアップした「作品へのアプローチ」を新設。



キャッチコピーや整理された基本情報で作品の性格を一目で把握。

わかりにくい暦や時刻制度も新発想の図解で確実に理解。



『源氏物語』は年表・内容・系図などの資料を見やすく整理。

『百人一首』は全首に品詞分解と鑑賞を掲載し美しく構成。

近現代文学編

新教材の筆者情報を充実。現代文の学習をサポート。

住居



明治時代の住居は、主に木造の長屋や、地主の邸宅に分けられる。長屋は、多くの家族が狭い空間で暮らす密集型住宅で、防火設備が乏しかった。地主の邸宅は、大規模な庭園や茶室、書斎などを備え、格式高い建物であった。

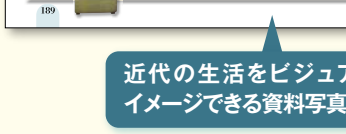
生活用品



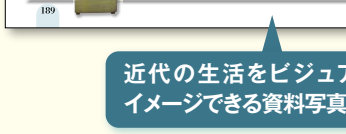
照明



電化製品



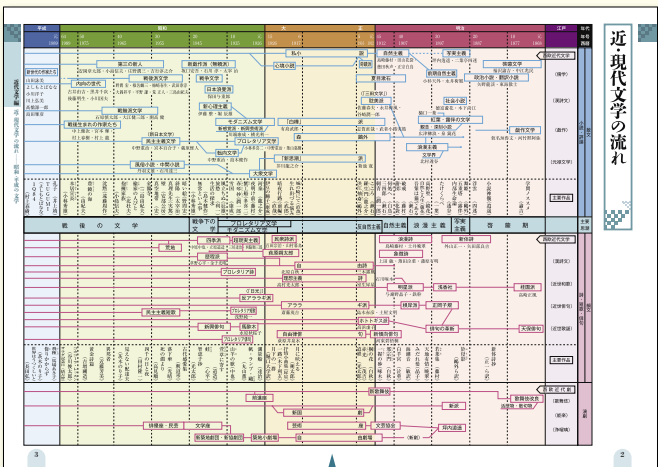
生活



近代の生活をビジュアルにイメージできる資料写真が充実。

明治と現在の東京を写真で比較した東京文学地図。

主要な作家・作品には特集ページを設定し、年表や地図・写真資料を交えて作品の世界をビジュアルに再現。



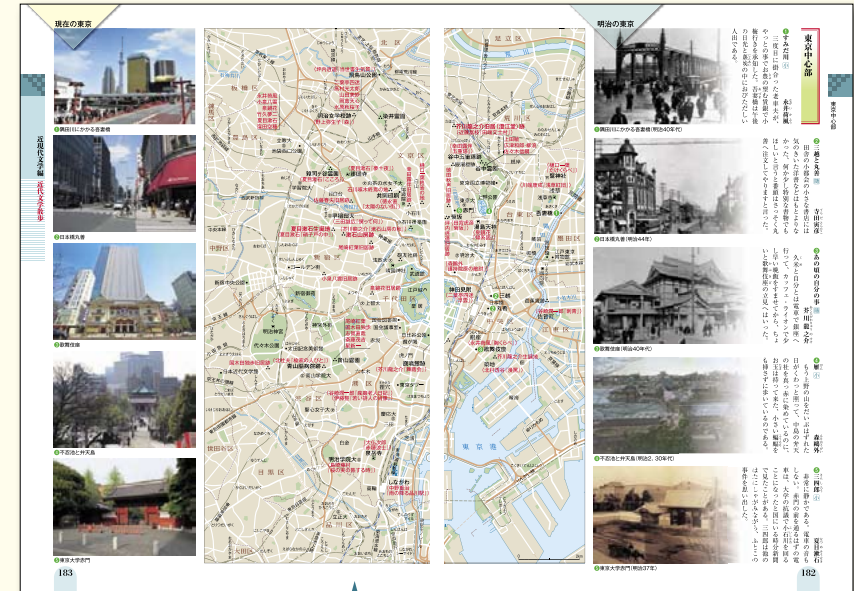
文学史の流れを一望できる展開図を収録(古典文学編にも収録)。

見るだけでも楽しめる、多彩なテーマのビジュアル資料を充実。

近代文学の鑑賞に欠かせない「近代の生活」を写真資料で再現。

作家紹介を計422人に大幅増補。(小説149人、詩歌100人、評論120人、外国文学53人)。

『まごころ』『舞姫』を大特集。作品の全体像と背景をビジュアルに整理。



「舞姫」ではエリスのモデルに関する最新の研究にも言及。



ビジュアル資料と近年の学習傾向に合わせた項目を充実。

[illegible]

- ・詩文に詠まれる景勝地や古戦場を紹介する「漢文の風景」。
- ・文字に関する資料をまとめた「漢字の歩みをたどる」。
- ・各時代の地図と年表を同時に確認できる「漢文学の流れ」。
- ・訓読の基礎知識をわかりやすく整理した「漢文を読むために」。

[illegible]

新項目の「三国志」では安野光雅の挿画で読みどころを紹介。

Close up:

▼李白の母が金星の精気に感じる夢を見、そして生まれたのが李白だという。そこで名を曰、字を太白（金星を太白星という）としたのだという。

▼また、李白は晩年、湖に小舟を浮かべて大好きな酒を飲みながら月を眺めていたが、興にのって、湖に挟った月をとろうとして、誤って水に落ち、溺死したのだといわれる。李白らしい伝説である。

実践的な表現活動に役立つ知識と情報を網羅。

・キーワードや手順を示した**詳細で実践的な小論文対策**。

・就職やAO入試に必要な知識を豊富に掲載。

・言語活動の実践ができる**ゲームや練習問題を掲載。**

・調べたい項目がすぐに見つかる**事典的な項目立て**。

[illegible]

7

発表

★視覚資料の種類

実物を見せる

シロウ・アンド・テ
ルとも呼ばれる手法
例えは商品企画との
場合は、試作品や模型
などは見て分かるが、
できれば効力が増す。

フリップやスクリーンなどを使う

大きめの紙にわかりやすく書いたり、

フなどの装置にも特長
 動画や音楽を使う
 収録していったビデオや音声を活用した、音楽や効果音を使う、この2つが効果的である
 スケットや音楽などを入れる
 伝えたいところを、実際に見せたり、すべしにしたり、テーマで行う場合は、役者や効果音などを入れる

講演会に呼ばれた講師の推薦
講演してほしい人の名前や住所
を一枚の紙にまとめる印刷し、配布
する。

聞いてわかる言葉を
耳で聞いただけではわか
言葉は、「つまり」「それ
とですが」などと言い換え
いは、「(血液→)血液の流
内の血液量→)脳の中に流
の量」のように、わかりや
を選ぶ。

ポイント4
資料は大きな文字で箇条書き、スライドなど、文字による資料は、文章ではなく、大文字で箇条書きにするとよい。ながら、ポイント（指示性）で該当の語句を指示する。

ポイント6
礼儀正しく
終了したら、会場を見送
り、落ちついて一礼をする



たは二 授業の進め方

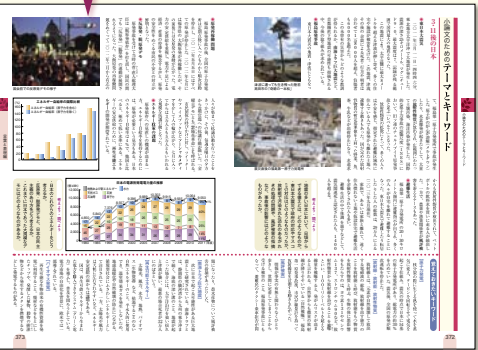
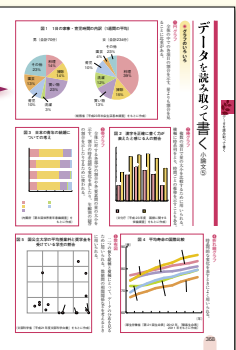
- 応用文
- テキスト
- 読解問題

① 語句を転換するとはひびくような響きを生かして、
② 語句を大切にするとは、一文呼吸あけることを心がけること。
③ 語句を大切にするとは、一文呼吸あけることを心がけること。
④ 語句を大切にするとは、一文呼吸あけることを心がけること。

手順や作例を示した具体的・実践的な表現活動の手引きが豊富。

さまざまなグラフ
の読み取り・解釈
などPISA型学
力にも対応。

小論文対策が充実。9.11、3.11後の世界の多岐にわたる問題・テーマ・キーワードを整理。



さらに使いこなすためのデータと問題集をご用意



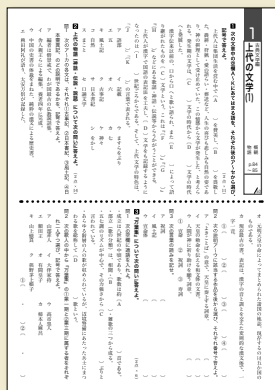
教師用



準拠CD-ROM

- ・本文のテキストデータ、地図や参考資料の画像データ、準拠問題集のデータ等を収録しています。
- ・画像データは、一点ずつ収録しているので、テキストと画像を組み合わせるオリジナルプリントの作成が可能です。

生徒用



準拠問題集

- ・文学史、文法・句法、言葉のきまりなど、『ビジュアルカラー国語便覧』に即して要点を確認できる完全準拠の生徒用問題集です。
- ・データは、準拠CD-ROMに収録しています。

*準拠CD-ROMの画像データには、自社作成の地図や図表等を収録しています。
*準拠CD-ROM・準拠問題集は作成中であり、内容や形式が変更になる可能性があります。